

ART SUPPORT CENTER

南関東・甲信

障害者アートサポートセンター

2024年度事業報告書

厚生労働省 令和6年度障害者芸術文化活動普及支援事業



ART SUPPORT CENTER

南関東・甲信

障害者アートサポートセンター

2024年度事業報告書

厚生労働省 令和6年度障害者芸術文化活動普及支援事業



Contents

はじめに	03
障害者芸術文化活動普及支援事業 南関東・甲信ブロック	04
南関東・甲信ブロック支援センター	06
南関東・甲信ブロック広域センター 実施団体	08

Part 1 トークイベント 09

うみのもりの玉手箱 4 関連トークイベント 「つくる・つたえる・つながるサミット」	10
第1部 千葉県内の障害のある人の表現活動を広げるために	11
第2部 南関東・甲信ブロックの 障害者芸術文化活動支援センターによる座談会	15

Part 2 研修 19

1. 支援センターの活動事例から鑑賞支援について考える 講師：ザワメキサポートセンター (長野県障がい者芸術文化活動支援センター) / YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター	20
2. 広報物のアクセシビリティについて考える 講師：兵藤茉衣、篠田 菜 / 畠山邦男	22
3. 支援センターが企画する公募展を見学する	25
[Topics 連携企画 1] 南関東・甲信ブロック支援センター パンフレット制作	26

Part 3 意見交換会 27

1. 「ネットワーク」「情報収集・発信」について意見を交わしました！	28
2. 注力する事業や支援センターとの連携について話し合いました！	30
3. 「広報物のアクセシビリティ」について意見を交わしました！	33
[Topics 連携企画 2] 見学・交流企画	34
[Column] 展示会の出展や登壇などの連携や交流が生まれました	36

Part 4 事業評価 37

評価体制 / 評価方法	38
アンケートとロジックモデル	39
評価チームによるコメント 長津結一郎 / 藤原顕太	42

おわりに	44
南関東・甲信ブロック 支援センター一覧	45

はじめに

南関東・甲信ブロックの広域センターを受託して4年目を迎えました。それぞれの支援センターは、地域性や運営団体の専門性、予算や人員体制などが異なる状況ではありますが、各地の特色に合わせて活動しています。

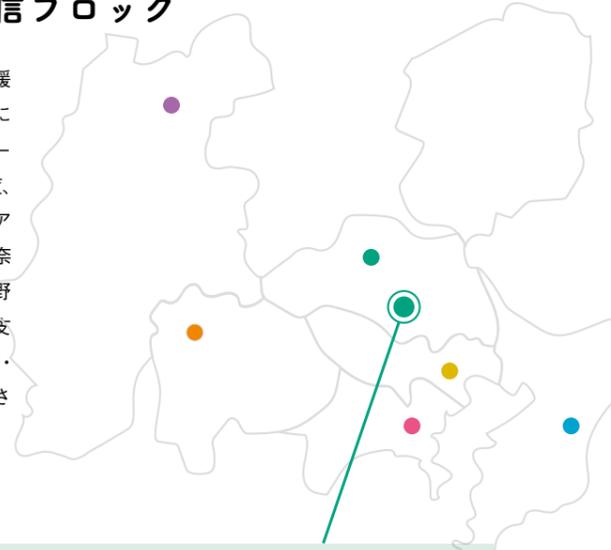
今年度も、各支援センターがもつ強みや知見を共有し合い、活動を学び合う機会として、ブロック会議、研修、各都県における事例報告・意見交換会などを実施しました。事業を通して、各々の課題についても相互に助け合いながら、「みんなで考える」ことができるネットワークを目指し、活動しています。

また、今年度は新たな取り組みとして、千葉県の支援センターが企画する展示会に合わせて、千葉県内の福祉施設や自治体に加えて支援センターの担当者も登壇するトークイベントを開催しました。さらに、ブロック内の支援センターの魅力を紹介するパンフレットを作成して配布するなど、広報に注力しています。ほかにも、県域を越えた展示会への出展協力や相談事業などでの連携を通して、つながりが深まりました。

本書では今年度の中心活動を一冊にまとめています。各地で行われている障害のある人の芸術文化活動の発展に寄与し、本事業の支援センターだけでなく、この分野に関わる方々の取り組みの一助になれば幸いです。

障害者芸術文化活動普及支援事業 南関東・甲信ブロック

障害者芸術文化活動普及支援事業では、全国を7ブロックに分け、それぞれに広域センターを設置しています。2024年度、南関東・甲信ブロックのエリアには、埼玉県、東京都、神奈川県、千葉県、山梨県、長野県があり、1都5県に7つの支援センター(埼玉県には基幹型・特色型の2センター)が設置されました。



NOTE

南関東・甲信障害者アートサポートセンターの取り組みは、2017年度から実施されている「障害者芸術文化活動普及支援事業」の一環です。当事業は、障害のある人が芸術文化を享受し、多様な芸術文化活動を行えるようにするための事業です。地域における支援体制を全国に展開し、障害のある人の芸術文化活動の振興を図るとともに、自立と社会参加を促進します。都道府県ごとの「障害者芸術文化活動支援センター(支援センター)」、ブロックごとの「障害者芸術文化活動広域支援センター(広域センター)」、全国の「連携事務局」といった支援拠点を設置しています。全国に障害者の芸術文化活動支援の仕組みを整えると同時に支援センター、広域センター、連携事務局のネットワークを構築し、県境を超えて広域でも連携しつつ、地域での振興を図りながら全国規模で推進しています。

南関東・甲信ブロック広域センター
南関東・甲信障害者アートサポートセンター

- 埼玉県支援センター(基幹型)
埼玉県障害者芸術文化活動支援センター
アートセンター集
- 埼玉県支援センター(特色型)
ART(s) さいほく
- 千葉県支援センター
千葉アール・ブリュット
センター うみのもり
- 東京都支援センター
東京アートサポートセンター
Rights (ライツ)
- 神奈川県支援センター
神奈川県障がい者
芸術文化活動支援センター
- 山梨県支援センター
YAN 山梨アール・ブリュット
ネットワークセンター
- 長野県支援センター
ザワメキサポートセンター
(長野県障がい者芸術文化活動支援センター)

2024年度の事業内容とスケジュール

今年度は、千葉県でのトークイベントや当ブロックの各支援センターの活動を発信するパンフレットの制作を中心に取り組みました。

事業内容

- ① 支援センターへのヒアリング
- ② ブロック会議
- ③ 各都県における事例報告・意見交換会
- ④ 研修
- ⑤ 支援センター事業の発信
- ⑥ 情報収集・発信
- ⑦ 事業評価への取り組み
- ⑧ 報告書の作成
- ⑨ 見学・交流企画

2024年度の目標

昨年度の事業評価に加えて、各支援センターにヒアリングした課題と、ニッセイ基礎研究所作成の『全国の障害者による文化芸術活動の実態把握に資する基礎調査報告書(令和2年度・令和3年度)』を参考に、下記の通り目標を設定しました。

- 1 支援センターの支援力の向上**
主体的に対話し、学び合うことで各支援センターの支援力向上を目指す。
- 2 ブロック内連携と相互フォロー体制の構築**
連携を促進し、相互フォローしながら「みんなで考える」体制を構築する。
- 3 鑑賞・発表機会の拡充**
展覧会やイベントでの連携や、各支援センターとの意見交換を通じて鑑賞や発表の場について考える。
- 4 支援センター認知度の向上**
本事業を親しみやすく紹介し、支援センターの魅力を発信する。
- 5 基本計画未策定の自治体に向けた働きかけ**
自治体と協働し、地域や分野を横断した事業の推進を目指す。

専門外の分野を強化したい(美術、福祉、舞台芸術)

中間支援組織としての役割とは…

アクセシビリティについて考える

十分な広報活動を行っていない

都県内全域でネットワークを拡充したい

スケジュール

Topics 今年度はパンフレットを制作しました! → p. 26

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月				
① 各支援センターへのヒアリング	② ブロック会議	⑦ 評価チーム会議	② ブロック会議	④ 研修	② ③ (自治体事例報告・意見交換会) ブロック会議	④ 研修	⑤ パンフレットの作成	② ブロック会議	⑤ パンフレットの配布	④ 研修	⑤ トークイベント	⑦ 事業評価アンケート & ヒアリング	⑧ 報告書の作成	② ブロック会議	⑤ ⑥ 報告書の配布
⑥ ホームページ・SNSなどでの情報収集・発信															
⑨ 見学・交流企画															

Topics 今年度も見学・交流企画を実施 → p. 34

■ 南関東・甲信ブロック支援センター

南関東・甲信ブロックで活動する、6つの支援センターを紹介します。
 埼玉県支援センター（基幹型）は p.8 に掲載。
 またそれぞれのお問い合わせ先は p.45 をご参照ください。

埼玉県支援センター（特色型）

ART(s)さいほく

2019年に埼玉県で二つ目の支援センターとして活動をスタートし、県北部・西部地域の障害のある人たちの芸術や表現活動のサポートを行っています。「地域とつながる」ことをテーマの一つとして、まちの文化財を活用した作品展などを地域の人や団体と協働しながら実施。また相談支援事業所との連携により、在宅で創作活動を行う人たちの作品の発掘やサポートにも力を入れています。作者へのいねいなサポートの充実や地域との連携を目指します。
 まちや地域の事業所の職員も協働して展覧会を企画するなど、地元の地域を中心に活動しています。市町村ならではの地元の情報から作家につながることもあり、2024年度は東松山市総合会館での展覧会「アートセッションズ in さいほく 2024」に加えて、埼玉県北部や群馬県在住の4名の作家による「情熱のかたち」展も開催しました。



千葉県支援センター

千葉アール・ブリュットセンター うみのもり

千葉県を中心に「人材育成講座の開催」「美術、舞台分野の相談受付」「ネットワークの構築」「展示・発表の機会の創出」「情報収集・発信」に取り組んでいます。芸術文化活動を支援する人の技術習得の場の確保、また表現者の体験を提案し、展示や発表の機会を設けています。「うみのもり」という名称には、芸術文化を通して多種多様な生きものを養い、海そのものの水質をも浄化する「藻場」のような場所でありたいという想いが込められています。
 2024年度は新たに県内11カ所で巡回展も開催しました。巡回展では、2023年度の「うみのもりの玉手箱」での受賞作品の複製画を展示し、会場での出張相談会も行っています。



東京都支援センター

東京アートサポートセンター Rights（ライツ）

障害のある方々が生み出す美術・身体表現・音楽などの創作やそれを取り巻く環境の充実を目指して、さまざまな視点から障害のある方の表現について考え、その表現を通じて創作環境の理解や知識の拡充につなげるプロジェクトを展開しています。専門家との連携やネットワークを活かした相談支援に取り組むとともに、障害者と地域の人たちがつながる機会をつくるため、多分野で活躍する地域の人々と一緒に活動しています。
 2024年度はアクセシビリティと合理的配慮をテーマにシンポジウムを開催。さらに、江東区の福祉事業所や商店街などとの連携により、ダンスや歌、演奏などパフォーマンス表現の発表と、平面作品の展示を行いました。



撮影：たかはしじゅんいち

神奈川県支援センター

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

2020年度に開設。障害のある人の芸術文化活動に関する相談対応や、活動を支えるネットワークを構築する「つなぐ」、芸術家によるワークショップや展覧会などの実施を通して、体験や発表の機会を創出する「つくる」、障害のある人の芸術文化活動を支援するコーディネーターを育成する「支える」の3つを柱に活動を展開しています。障害のある人が身近な地域で芸術文化に触れられるよう、障害福祉・芸術文化のネットワーク構築を目指しています。
 2024年度は県内8カ所の福祉施設でアーティストによるワークショップを実施。施設のニーズに合わせてさまざまなジャンルのワークショップを行い、それぞれの表現を見つける時間をつくりました。



撮影：金子愛帆

山梨県支援センター

YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター

2016年度より活動し、障害のある人の芸術活動に関する相談を受け付け、また県の地理的条件を超えた連携、施設間やアート活動を行う支援者、支援団体との交流を通して障害者の芸術活動支援を進めています。特徴は寄せられた相談をもとに事業所などを訪問し、助言や情報提供、アート体験ワークショップを行うアートカフェミーティングを実施していること。相談者のニーズに寄り添うことで一軒一軒との関わりも深まりネットワークの構築にもつながっています。
 2024年度は甲府駅近くのギャラリーや店舗など6カ所で「『雑踏』展 in 甲府」を開催し、県内5名、県外5名の10名の作家の作品展がありました。



撮影：本杉郁雲

長野県支援センター

ザワメキサポートセンター（長野県障がい者芸術文化活動支援センター）

障害のある人が創作や発表機会を通じた交流など多様な芸術文化活動を行うことを目指し、2022年にスタート。2016年から開催している「ザワメキアート展」を継続して開催するとともに、作品の販売や著作権などに関する相談支援、芸術文化活動に関する研修などを行い、障害のある人やその支援をされる人を幅広くサポートしています。
 支援センター設置後は、多分野のゲストキュレーターを迎えて、「ザワメキアート展」を開催しています。2024年度は伊那市と大町市の2カ所で開催しました。大町市では、「北アルプス国際芸術祭」、「信州アーツカウンシル」との連携により鑑賞ツアーも実施しました。



■ 南関東・甲信ブロック広域センター 実施団体

広域センター

南関東・甲信障害者アートサポートセンター

各支援センターが協働し、相互フォローしながら「みんなで考える」体制をつくる。

障害者芸術文化活動普及支援事業で定められた南関東・甲信ブロックでは、2020年度まで東京都と埼玉県の2団体が広域センターを担い、首都圏の豊富な芸術文化資源やネットワークを活かした事業を実施しました。新たな支援センターの設置や、自治体の基本計画策定も進み、ブロック全体の支援力向上に寄与しました。2021年度からはみぬま福祉会が採択され、今後もさらにブロック内の各支援センターが力をつけていくために、当センターでは各支援センターが主体的に参加できる事業を実施しています。それぞれの知見や強みが発揮され、課題はお互いに補うことができる「みんなで考える」ネットワークづくりを目指しています。



埼玉県支援センター（基幹型）

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集

障害のある人のアートの意義を県内に普及させ、魅力を伝え広げていく。

埼玉県では、2009年から福祉部障害者福祉推進課による「障害者アートフェスティバル」を実行委員会形式で毎年開催し、作品展やダンス公演、バリアフリーコンサートなどの事業が実施されています。行政が主体となり福祉、美術、教育などの機関が協働しながら、障害のある人たちのさまざまな表現を社会に発信してきました。またその一環で始まった「埼玉県障害者アート企画展」に加えて、「障害のある方の表現活動状況調査」もスタート。県内から集められた調査票から出展作品を選ぶという方法も生まれました。これらの事業にみぬま福祉会が継続的に携わってきた経緯を踏まえ、2016年には本助成を受け「埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集」を設立。官民の連携が強化されました。特色型センターのART(s)さいほくも加わるネットワークの醸成により、表現活動を始めの人や展覧会運営に携わる人、作品を楽しむ人たちが増えるなど、多様な形で広がっています。



実施団体

社会福祉法人みぬま福祉会

働くことを権利とし、どんな障害があっても、受け入れる施設。

みぬま福祉会は、1984年に、重い障害を理由に学校卒業後の進路がない人たちのために「どんな障害がある人でも受け入れる」という理念を掲げて発足。「困難や例外的な状況にある人を切り捨てない」ことを大切にして、さまざまな困難を抱えた人を受け入れています。現在は埼玉県南部を中心に通所・入所相談支援事業など22の事業を展開、利用者は300人を超えています。

●工房集プロジェクト

障害のある人の「表現活動」を社会につなぎ、新しい価値を創造する。

労働は権利と考えて活動の主軸にし、「仕事に人を合わせるのではなく、一人ひとりに合わせた仕事をする」ことを大切にしてきました。当初は利用者に関わる軽作業（ウエスづくりや缶プレスなど）を行っていましたが、その作業に合わない人がいたことをきっかけに、利用者一人ひとりの想いに寄り添ったことで始まったのが「表現活動」でした。

しだいにほかの利用者にも表現活動が広がったため、みぬま福祉会の表現プロジェクトを社会につなげる活動拠点として、2002年に工房集を開設。「利用する人だけの施設としてではなく、新しい社会・歴史的価値観をつくるためにいろんな人が集まっていこう、そんな外に開かれた場所にしていこう」という想いを込めて「集（しゅう）」と名付け、アトリエ、ギャラリー、ショップ、カフェを備えました。設立時から、アートディレクター、デザイナーなど多分野の専門家と協働して、プロジェクトを展開し、現在は法人全体で11のアトリエを中心に150名ほどが、さまざまな表現を生み出しています。

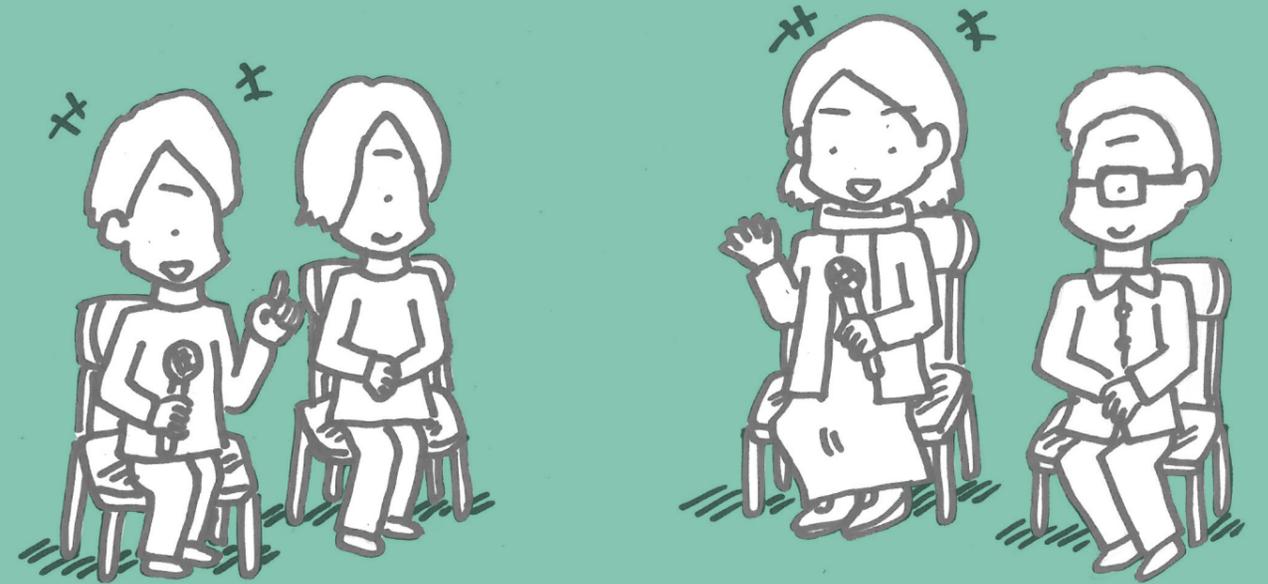


Part 1

TALK EVENT

トークイベント

今年度は新たな試みとして、千葉県支援センターが企画する展覧会にあわせて千葉県と広域センターの主催によるトークイベントを開催しました。千葉県での障害のある人の表現活動や、支援センターのネットワーク構築などをテーマに、自治体や支援センター、福祉施設の職員が分野を横断して語り合いました。



うみのもりの玉手箱 4 関連トークイベント

「つくる・つたえる・つながるサミット」

～千葉県の障害のある人の表現活動と南関東・甲信エリアの障害者芸術文化活動支援センターの事例について考える～

千葉県の事例と南関東・甲信エリアの障害者芸術文化活動支援センターの事例から、障害のある人の表現活動とそこから生まれるつながりをテーマに、トークイベントを開催しました。本書ではそのレポートを紹介します。

第1部では「千葉県の障害のある人の表現活動を

広げるために」、第2部では芸術文化活動を通して生まれたつながりが育むものとは何か、をテーマに「南関東・甲信ブロックの障害者芸術文化活動支援センターによる座談会」を開催。千葉県内の出展団体や自治体、南関東・甲信エリアの障害者芸術文化活動支援センターから、多様なゲストが語り合いました。

開催概要

- 会期：2025年1月21日(火) 14:00～16:00
- 会場：千葉県立美術館講堂(千葉県千葉市中央区中央港1-10-1) / 参加無料
- 主催：千葉県、南関東・甲信障害者アートサポートセンター(社会福祉法人みぬま福祉会)
- 協力：千葉アール・ブリュットセンター うみのもり
- 助成：厚生労働省 令和6年度障害者芸術文化活動普及支援事業
- ※本イベントは、展覧会「うみのもりの玉手箱4」の関連企画として開催されました。

プログラム

第1部：千葉県の障害のある人の表現活動を広げるために(14:00～15:00)

「うみのもりの玉手箱4」に出展した2つの団体から施設での活動を紹介します。その後、千葉アール・ブリュットセンター うみのもりや自治体担当者や千葉県での表現活動の広がりについて語り合います。

登壇者：高本涼子(まあい広場施設長)、高安一弘(社会福祉法人楨の実会総合施設長)、こまちだたまお(千葉アール・ブリュットセンター うみのもり)、関めぐみ(千葉県環境生活部スポーツ・文化局文化振興課企画調整班班長)

第2部：南関東・甲信ブロックの障害者芸術文化活動支援センターによる座談会(15:10～16:00)

芸術文化活動を通して生まれたつながりやネットワーク、さらに各地で広げるために必要なことは？ 第2部では千葉アール・ブリュットセンター うみのもりや南関東・甲信エリアにある障害者芸術文化活動支援センターのスタッフと地域を超えて語り合います。

登壇者：石平裕一(ART(s)さいほく)、川村美紗(神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター)、こまちだたまお(千葉アール・ブリュットセンター うみのもり)、瀧澤聡(YAN山梨アール・ブリュットネットワークセンター)、中村勘二(ザワメキサポートセンター)、村上あすか(東京アートサポートセンター Rights(ライツ))、城田侑希(アートセンター集)

司会：藤原顕太(一般社団法人ベンチ)



Summit

p.25で詳しく紹介しています

うみのもりの玉手箱 4

- 会期：2025年1月15日(水)～26日(日) 9:00～16:30 / 1月20日休館
- 会場：千葉県立美術館第5展示室 / 入場無料
- 主催：千葉県



会期中は絵画、彫刻(立体)、写真、書、クラフトや詩に加えてフラッグなど多様な作品が展示されたほか、詩の朗読や人材育成講座などのイベントも行われた

第1部



千葉県内の障害のある人の表現活動を広げるために

4度目の開催となる公募展「うみのもりの玉手箱」。第1部ではまず、今回の企画やこれまでの経緯について、県の担当者と支援センターから説明がありました。そして展覧会に参加した2団体の取り組みについて、それぞれの施設長から紹介。その後のトークセッションでは、企画に込められた思いや参加して感じたこと、そして県内のネットワークをつくっていくことについて、意見が交わされました。

県による活動推進の動き ——千葉県文化振興課



関めぐみ [せき・めぐみ]
千葉県環境生活部スポーツ・文化局文化振興課企画調整班班長。2023年4月から文化振興課に所属。現在の業務で障害のある人の作品に出会い、それまで見たことのない表現に心揺さぶられる。また障害福祉事業所などで作品制作の現場を見学したことで、作家の思いや作品の魅力に引き込まれている。

トークの冒頭では、千葉県の障害者芸術文化活動の取り組みについて、本事業を担当する文化振興課の関めぐみさんから説明がありました。2018年に「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が施行され、同じ年に千葉県でも文化芸術の振興に関する条例が施行。2019年度に支援センターがスタートしました。その後、障害者文化芸術活動推進計画や文化芸術推進基本計画を策定し、あらゆる人の文化芸術活動の取り組みを推進しています。千葉県の支援センターである千葉アール・ブリュットセンター うみのもり(以下、うみのもり)は、2023年度までは補助事業として実施していましたが、より一層、障害者芸術文化活動を推進していくため県が主体となって実施することとし、2024年度からは県の委託事業となりました。巡回展の開催や作者や作品の発掘調査などが追加され、事業の拡充が図られています。

「月に一度、県と支援センターとの打ち合わせを行い、さまざまな情報共有や意見交換などを行っています。文化振興課では福祉事業所との関わりがなかったため、今回のトークセッションをきっかけに一緒に登壇している福祉事

業所の施設見学ができたことも大変貴重でした」と関さん。うみのもりの具体的な活動については、うみのもりのセンター長であるこまちださんにバトンタッチしました。

千葉県の障害者芸術文化活動の取組

- 2018年 千葉県文化芸術の振興に関する条例施行
- 2019年度から支援センターを設置(補助事業)
- 2021年 千葉県障害者文化芸術活動推進計画策定(計画期間：2021年度から2026年度まで)
- 2022年 千葉県文化芸術推進基本計画策定(計画期間：2022年度から2024年度まで)
- 2024年度から委託事業に変更(巡回展と発掘調査追加)

千葉県の近年の障害者芸術文化活動の取り組み

小さな美術教室から県の支援センターへ ——千葉アール・ブリュットセンター うみのもり



こまちだ たまお
千葉アール・ブリュットセンター うみのもりセンター長。1998年より、たまあーと創作工房 こども教室美術教室を千葉県・上総一ノ宮に開設し、1歳から20歳までのボーダーレスなアートの共有活動に取り組む。2019年に株式会社いるだまを設立、代表取締役就任。2020年より現職。

こまちだたまおさんは1998年、うみのもりの所在地でもある長生郡一宮町で「たまあーと創作工房 こども教室美術教室」を開室。2019年に法人化し現在も続く教室ですが、「はじめたときから、障害のある人も来てくれるだろうと思っていました」と言います。展覧会を見たり奈良県のたんぼぼの家の研修に参加したりしながら勉強を重ね、生

徒とともに教室をつくってきました。現在、出張授業も月に約30カ所で行っていますが、それは教室に通う子どもの保護者からの相談がきっかけだそうです。「保護者さんに福祉や教育関係の方が多く、うちでもやってくれませんかとお声がけいただいて。保育園やこども園、学校、そして福祉事業所にも伺うようになりました」とこまちださん。出張授業のほか、展示会の企画運営、アートと福祉を通じた地域創生事業、ワークショップなどの活動を行っています。「うみのもりの玉手箱」は今回が4回目。2021年以降、継続してうみのもりが実施を担い、こまちださんの長年の経験が活かされています。

「多様性の表出は寛容性を生む」。これは教室を始めた頃から一貫しているこまちださんのテーマです。「アートはさまざまな答えを生み出すことのできるツール。だからこそアートがあると、いろんな人とともに時間を過ごせる」と考え、実践を重ねているといいます。



植草学園大学（千葉）でのワークショップ「えのぐと布を使ったドロイング」（2024年）



展示会「うみのもりの玉手箱」の設営には出展施設の職員や県内の大学生も参加。額装や展示作業などを学ぶ場になっている

千葉アール・ブリュットセンター うみのもり

「多種多様な生き物を養い、海そのものの水質をも浄化する、海中の藻場のようにいたい」という想いを込めて2020年に開設。子どもや大人、障害のある人も通う運営母体の造形教室のノウハウを活かして表現を楽しむ場づくりに力を入れている。

個性やこだわりが発揮できる環境づくり ——まあい広場



高本涼子 [こうもと・りょうこ]
社会福祉法人九十九会まあい広場施設長。1988年、社会福祉法人九十九会横の木学園（児童入所施設）に入職し、2002年にまあい広場（生活介護事業）へ異動。重い障害があっても、好きなことやできることを中心に自由に豊かな日々の保障をしたいと考え、仕事をしている。

次に、「うみのもりの玉手箱4」に参加する2つの団体から、それぞれの施設での取り組みについて紹介されました。

社会福祉法人九十九会が運営する、まあい広場からは施設長の高本涼子さんが登壇。まあい広場は個人の邸宅だった建物を利用した福祉施設です。敷地内には木々に囲まれた庭や大きな蔵もあり、蔵はギャラリーやアートショップとして活用されています。利用者は和紙や縫製、織物、染色をはじめとする創作活動を行い、年に一度、敷地内のギャラリーで開催する展示会に向け、新作をつくることを目標にしています。「うみのもりの玉手箱」に出展した作品は、「施設の修繕で出たフローリング材を分割し、一人1枚ずつ描いたものを重ねました。一人で大きなものをつくるのは大変。みんなでつくったものを一つの作品にしていく活動を常々しています」と高本さん。

また、同じ仕草で絵を描き続ける^{ますもとよしあき}山本吉隆さん、とにかく数字が好きで数字を書き続ける^{やまもとだいすけ}山本大介さんを紹介。「山本さんは昼休みになると自転車小屋にしゃがみ込み、枝で土をほじっています。創作活動も同じスタイルで、部屋の床にしゃがみ込んでクレヨンで絵を描きます。山本さんは



作品制作をする山本吉隆さん

ずっと数字を書いていて、その間は安定して落ち着いて過ごしています」と高本さん。つくり手がかんたくりや動作などが創作活動においても保障されていることが重要と言います。

締めくくりに、「一つの作品に出会うことは一人の人と出会うこと」という、ギャラリーのオーナーの言葉を紹介。「個性を發揮できるように環境を整え、その人が望む時間が過ぎせるようなサポートをこれからも続けていきたい」と話しました。



「うみのもりの玉手箱4」に展示した作品。左：佐藤元基〈無題〉／右：共同作品〈無題〉

社会福祉法人九十九会 まあい広場

障害のある子どものお母さんたちとボランティアで行っていた遊びのサークルが基盤となり、1994年に千葉県千葉市美浜区で開所。2006年に移転。一人の作品が画廊に展示されたことを機にアート活動にも取り組む。一人ひとりが大切にされる社会を目指す。和紙制作から始まった手仕事は手織り、刺繍、染め物、縫製などに広がっている。

うみのもりとの出会いと試行錯誤の日々 ——楨の実会



高安一弘 [たかやす・かずひろ]
社会福祉法人楨の実会総合施設長。2000年、楨の実会ひかり学園に入職。入所施設の支援員から相談支援業務に就き、通所やグループホーム事業の統括を経て、現在に至る。地域活動「タコ足ケアシステム」にもかかわり、さまざまな活動に取り組む。

社会福祉法人楨の実会は、香取郡多古町で複数の事業所を運営する法人です。「アート活動をはじめてまだ日が浅く、歩き出したばかり」と話すのは、楨の実会総合施設長の高安一弘さん。手探りで歩みを進めてきたこれまでの活動を振り返りました。

高安さんが多古町ではじめてアートに関わる活動をしよう

としたときに、紹介されたのがこまちださんです。たまあーと創作工房を見学し「これだ」と感じた高安さんは、早速こまちださんに依頼し、アートと福祉をテーマにした研修会を実施。以後高安さんはこまちださんとともに活動を展開しています。

元酒屋の店舗を活用した「たこまち水族館」は、多古町と協働して取り組んだ2021年から3年継続された居場所づくりの活動です。町内のこども園や学校の子どもたちとワークショップなどを行いながら、つくった作品を展示して水族館をつくりました。また、2つの福祉施設では壁画制作も実施。福祉の現場は安全性を重視し「やっちはダメ」なこともあります。制作を通して「見守って待つ」雰囲気が育まれたといいます。

さらに2023年には、年度はじめの事業計画を発表する場で、職員から多くの人の目に触れられる「そごう（千葉店）に展示したい」と宣言があり、その年のうちに実現しました。しかし宣言当初は高安さん自身も「さあどうしよう」という状態。こまちださんに相談し、まずは職員を対象に研修会を実施しました。実際に画材に触れ、手を動かすことで、職員自身が思考を解放していったといいます。そして少しずつ、利用者たちの表現活動が始まり展示につながりました。

高安さんは今回登壇するにあたり工房集を見学。その際に聞いた「それぞれの『表現』を大切にしていれば自然と作品は生まれてくる」という言葉にハッとしました。「作品をつくることはばかり考えていましたが、この言葉を受けて、



「たこまち水族館」に関連したワークショップや壁画制作

社会福祉法人楨の実会

1994年、重度知的障害者の保護者により千葉県香取郡多古町に開所。「一日一笑!毎日賑やか!」を基本理念に、入所施設に加えて13のグループホームと5つの通所施設を運営。近年はアート活動も取り入れ、絵具を使った創作や身体表現などのワークショップも行っている。

一度原点に戻ってまた動き出しているところですよ」と高安さん。



そごう千葉店での展示

「うみのもりの玉手箱」でつながるネットワークそれぞれの活動紹介のあと、登壇した4名でトークセッションを行いました。展示会について、またこれからのネットワークづくりについて、感想や意見が交わされました。

——「うみのもりの玉手箱4」について、企画に込めた思いや、参加された感想をいただけますか。

こまちだ：コロナ禍のあいだ、いろいろな調査をしました。長年取り組まれているところもあるものの、千葉県は他県に比べるとアートの活動をしている事業所が少ない印象です。ただコロナ禍だからこそ少しずつ始めたいという事業所もありました。ですので、今こそネットワークづくりを大事にしていきたい。それは今後も含めて考えているところですが、今回は埼玉県の工房集、県内で長年続けているまあい広場、さらに横の実会など、ベテランから初参加までおられます。展示会を通して学び合い、つながれたらという思いを込めて企画しました。

高本：私たちは毎年、職員と利用者全員で見に来ています。自分の作品が展示されているのを実際に見ると、利用者自身もモチベーションが高まっているように感じられます。展示会の場に利用者をつなげることもまた、職員の大事な仕事です。本人もそうですが、自分の子どもの作品が県立美術館に展示されるなんて、多くの家族は考えもしないこと。利用者やその家族にとっての希望になる企画だと思っています。

高安：事業所の利用者はどうしても、個人名じゃなく「利用者さん」と呼ばれるのですが、私たちの目標は、利用者が地域のみなさんから個人名で呼ばれることです。展示会で

は個人名が前に出てくるのが非常にうれしい。表現活動を通して一人でも多く、名前を覚えてもらえたらと思っています。

——県内のネットワークをつくっていくために、何が必要でしょうか。

高安：ネットワークという点で気になっているのは、こういった企画を在宅で活動する方へ周知することです。施設に所属している方はチャンスがあると思いますが。

こまちだ：そうですね。私は精神科に入院している方などにも参加してもらいたいのですが、公募のお知らせは送付しているものの、積極的にはアプローチしにくいところです。より広く情報を届けることは、誰もが表現者になれる、誰をも拾うということにつながります。千葉県は中核地域生活支援センター事業^{*1}という県独自の福祉システムがあり、その集会上がかって周知したりもしています。

関：まあい広場と横の実会の表現活動を模索される様子をお聞きして、県としてもよい事例を共有できるような横のつながりをつくっていききたいと思います。今回のタイトルにもある「つくる・つたえる・つながる」、この3つは大事な視点ですね。うみのもりと一緒に、千葉県の表現活動を盛り上げていけたらと思います。

こまちだ：ネットワークづくりの見本となるのが埼玉県です。35の団体が一緒に展示会を行っていて、本当に見習いたいところです。同じことをするから仲よくなれるし、同じ悩みを共有することで、よりつながっていけるのだと思います。

*1 地域で生きづらさのある人に対して、24時間・365日体制で、分野横断的に、包括的な相談支援・関係機関へのコーディネート・権利擁護など、広域的で高度専門性のある支援を行う事業。



南関東・甲信ブロックの障害者芸術文化活動支援センターによる座談会

地域の人や団体とのネットワークをつくることも、支援センターの役割の一つです。第2部では南関東・甲信ブロックの各都県の6つの支援センターから、つながりを育む取り組みについて、「地域の人・団体とつながる」「地域に出向く」という2つのテーマのもと紹介していきます。

テーマ1 地域の人・団体とつながる

前半では、地域のさまざまな人・団体と連携し活動を展開している事例について、3つのセンターが発表しました。

「芸術祭」「アーツカウンシル」とつながる ——ザワメキサポートセンター



中村 勤二 [なかむら・かんじ]
ザワメキサポートセンタースタッフ。1996年の福祉施設入職を機に、障害者の芸術活動支援の取り組みを始める。2011年に県内関係者とNPO法人を立ち上げネットワークの構築を推進。2016年より「ザワメキアート展」を企画運営。

まずは長野県のザワメキサポートセンターの担当者、中村勤二さんが「ザワメキアート展」での連携について話されました。

「ザワメキアート展」は2016年に公募展としてスタートし、2022年からは企画展として開催している展示会です。イラストレーターや考古学研究者など、開催ごとに特色のあるゲストキュレーターを迎えています。2024年は同県で開催された「北アルプス国際芸術祭2024」と連携し、芸術祭が開催された大町市にある総合福祉センターで実施しました。芸術祭のコンセプトに合わせ、支援センターアドバイザーの学芸員が作品をセレクトしました。また、今回は芸術文化の中間支援団体である信州アーツカウンシルとも協働で「障害のある方と巡るモニターツアー」を企画。障害のある人たちと芸術祭を巡り、そのレポートをまとめてタ

第2部



ブロイド紙として発行しました。モニターツアーの開催にあたっては「アーツカウンシルが美術関係者に声をかけ、こちらは福祉関係者に声をかけ参加者を募りました」と中村さん。それぞれの専門性を活かした、よい関係性ができていると言います。



「ザワメキアート展2024 ネイチャー イン アウト」。大町市総合福祉センター会場での展示

「文化施設」「商店街」とつながる ——東京アートサポートセンター Rights (ライツ)



村上あすか [むらかみ・あすか]
東京アートサポートセンターRights (ライツ) センター長。2021年より本事業を担当。地域や文化施設と連携しながらイベント、ワークショップ、しゃべり場など障害の有無にかかわらず多様な人がつながる場づくりを行う。

続いては、東京アートサポートセンター Rights (ライツ) の村上あすかさん。江東区の商店街で開催した「のらくろード『こーくりアートフェス』」について紹介しました。「こーくり」は異分野の人同士が協働し、新しいものをつくるこ

とを意味する co-creation (共創) の略です。

開催のきっかけは、江東区の文化施設から障害のある人向けのワークショップの実施について相談があった際に、ライツで区内の福祉施設に聞き取り調査をしたことです。福祉施設からの「地域の人とつながる取り組みをしたい」という声が、商店街というさまざまな人が行き交う場での開催につながりました。

実施にあたっては、福祉事業所や商店街の振興組合、近隣の小学校など、さまざまな組織や団体と連携。「商店街の振興組合の理事会にも参加し、協力をお願いするとよい団体や人など、いろいろなアドバイスをもらいました」と村上さん。

区内外から集まった出演者は、福祉施設の利用者や個人で歌を歌う人、障害のある人とその家族による劇団などさまざまです。「まち行く人たちも参加してくださいました。開催後、近隣の小学校の校長先生が参加団体の一つに小学校でのワークショップ実施の依頼をしたという話をしました」と村上さん。ライツが目指す「地域の人たちが主体的に動いて、継続していけるような環境づくり」につながっています。



のらくろード「こーくりアートフェス」(2024年)。100人以上が所属するダンスサークルは全員でヒップホップダンスを披露 Photo: たかはしじゅんいち

「福祉施設」同士でつながる ——TAMAP 土〇 (アートセンター集)



城田侑希 [しろた・ゆき]
アートセンター集スタッフ。2013年社会福祉法人みぬま福祉会に入職し、生活支援員として工房集に配属。2016年より埼玉県障害者芸術文化活動支援センターを兼務。

埼玉県の支援センター、アートセンター集の城田侑希さ



第15回埼玉県障害者アート企画展「Coming Art 2024」にて。ネットワーク参加施設や自治体の職員と

んは、埼玉県内の団体による「埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP 土〇」(以下、タマップ)と、タマップが実施する「埼玉県障害者アート企画展」について紹介しました。

今年で15年目を迎えた企画展は、当初は学生による企画だったそうです。障害のある人と身近に接する職員が主体的に関わることが人材育成にもつながるのではないかと、その思いから、その後福祉施設職員を中心とした体制に変化し、タマップが組織されました。

企画展の開催に向けては、まず福祉施設などから提出された調査票をもとに選考会を行います。2024年に集まった調査票は600件。「選考会には美術の専門家や弁護士などが参加しますが、そこに職員も入ります。展示や額装も、活動を始めたばかりの施設の職員も一緒になって、監修の先生と話し合いながら作業します」と城田さん。企画展を見に来た作家の様子などをみんなで共有することもまた重要と言います。

現在タマップの参加団体は35。事業所数では40を超え、創作活動をする人も増えています。そのネットワークの広がりには「継続があってこそ」と城田さん。「異動があってもちゃんと引き継ぎをして、異動先でまた参加する方もいます。そうしてまたつながりが広がっています」。

テーマ2 地域に出向く

支援センターを出て、積極的に会いに行くこともまた、つながる手法の一つです。後半では、福祉施設や自治体に自ら出かけることを重視する3つのセンターが、その活動を紹介します。

「自治体」に出向く ——ART(s) さいほく



石平裕一 [いしだいら・ゆういち]
ART(s) さいほくスタッフ。生活支援員と兼務。社会福祉法人昴が運営するアート活動拠点「まちこうば GROOVIN'」を担当。アトリエでの表現・創作活動などの支援や作品展などの企画を行っている。

埼玉県の県北西部を中心に活動するART(s) さいほくは、地域に密着した取り組みをテーマに活動を展開しています。

相談支援事業では、自身で自治体の福祉課・障害福祉担当を訪ねるまでは「支援センターや福祉事業所からの相談はあっても、自治体からの相談はあまりありませんでした」と、ART(s) さいほくの石平裕一さん。そもそも自治体職員や近隣の人たちは支援センターや普及支援事業のことを知っているのだろうかとか疑問がわき、役場に電話して話をすることに。一通り説明すると、返ってきたのは「どんなことを一緒にやれるといいでしょうか」という質問でした。このことをきっかけに、まずは自治体が主催する作品展のお手伝いを始めました。「展示方法を一緒に考えたり作業をともにしながら、だんだんと私たちの存在を知ってもらいました」と石平さん。



埼玉県越生町が主催する「第3回障がい者アート展 in おごせ」(2023年)の展示準備

自治体主催の作品展には、福祉事業所に所属せず自宅で制作している人の作品も出展されています。「作品がどのような経緯で出展に至ったかをたずねたところ、自治体の窓口に来る方の相談内容は生活に関する困りごとが大半で、自宅を訪問したときに何かをつくっていることを偶然知り、作品展への出展をすすめているようです。なかには2年越しで出展を決心された方もいます」と石平さん。自治体職員との良好な関係が築かれるまでの地道な取り組みを知ることができ、関係づくりの大切さを学んだと言います。

「相談先」に出向く——YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター



瀧澤 聡 [たきざわ・さとる]
YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター長。2014年に社会福祉法人ハケ岳名水会入職。2016年にYAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター事務局へ。2019年より現職。

YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター(以下、YAN)では、「アートカフェミーティング」と呼ばれる活動を継続的に実施していますが、実施するなかでそのあり方を変化させ、コロナ禍以降は県内の福祉施設などで出張開催しています。

8年前のYAN 発足当初から行っていたアートカフェミーティングは、毎月一度ざっくばらんに話す会でした。大学の先生や施設の職員、障害のある子どもを持つ保護者などさまざまな立場の人が集い、対話から課題解決につながるというものです。「ただ、年数が経つと参加する人が固定するなどマンネリ化し大きくなりすぎてしまいました」とYANの瀧澤聡さん。車座になって話をするだけでは、中間支援としての役割は発揮できないのではないか。ちょうどコロナ禍に入り、人が集まれないというマイナスな状況でもありました。そこで、「マイナスをプラスに変えていこう」と、相談の電話があった団体にYANが直接出かけることにしたのです。

「どうやって表現活動をしていけばいいかと相談いただいて、そこからアートカフェミーティングにつながるというのが主な流れです」と瀧澤さん。施設を訪ね、ヒアリングをして、問題解決の糸口になるワークショップを考えて提案する。アートカフェミーティングはそんな活動に変化していきました。一歩踏み込んだことで、それまで聞けなかった話を聞くことができていると言います。



アートカフェミーティングの出張ワークショップ(2022年)

「芸術家」と出向く——神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター



川村美紗 [かわむら・みさ]
神奈川県障がい者芸術文化活動支援センタースタッフ。福祉施設職員を経て、2017年にNPO法人STスポット横浜へ入職、福祉事業を担当。2020年の支援センター設立に伴い、現職。

神奈川県では支援センターがコーディネートし、福祉施設にダンスや音楽、美術などさまざまな分野の芸術家が出かけてワークショップを行っています。「今は文化芸術活動を行っていないけれども、日常を豊かにしたり、地域に開いていったりという活動のヒントをアートに求めている福祉施設は多いと感じています。モデルになる活動をつくっていったら」と、神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターの川村美紗さんは言います。

ワークショップを実施する施設は公募で選び、施設の要望や状況に応じて、ジャンルや芸術家を検討します。ダンスや音楽、美術などの表現活動を通して、福祉施設の利用者たちの普段は見えない一面を引き出します。

「芸術家は表現に関する専門性をもっていらっしゃる方たちですが、一方で福祉施設の方たちは日常的なコミュニケーションの専門家と言えます。それぞれの専門性が合わさることその人らしい表現の見方が深まっていくのが面白いところです」と川村さん。また、活動を重ねることで、施設自ら文化芸術活動に取り組む機運が高まることも期待しています。「それぞれの施設でやりたいことが出てきたとき、支援センターが情報や地域資源などをつなぐパイプになれば」と、実施した施設に活動が根付いていくよう働きかけています。



ダンサー・小暮香帆さんによる、福祉施設でのワークショップ (2024年)
Photo: 金子愛帆

ネットワークは継続した取り組みの先に

各支援センターが試行錯誤しながらつくってきた、つながりや連携の形を知り、司会を務めた一般社団法人ベンチの藤原顕太さんは「今日のお話で、来場者のみなさんもモチベーションがさらに高まったのではないのでしょうか。支援センターはみなさんが『うちでもこんなことをやってみよう!』というときに相談できるパートナーだと思います」とコメントしました。サミットの最後に、千葉アール・ブリュットセンター うみのもりのこまちださんも感想を述べました。千葉県は県内でもそれぞれの地域で様子が違い、県という枠で考えるのが難しいところもあるものの「他県での同じような悩みやみなさんのお話をまた共有できる場があるとうれしい」と、今回のような場が継続されることに期待を寄せました。また、こまちださん自身もさまざまなところに出て行く活動をしています。「各センターの話はとても参考になりました。県ごとに取り組みが大きく異なることや、このような県をまたいだネットワークがあることを、来場者のみなさんに知っていただくことができ、非常によかったです」と締めくくりました。



こまちだまお
千葉アール・ブリュットセンター うみのもりセンター長。
→ p.11



藤原顕太 [ふじわら・けんた]
南関東・甲信障害者アートサポートセンターに評価アドバイザーとして関わる。
→ p.43



Part 2
TRAINING
研修

鑑賞支援や広報物のアクセシビリティをテーマに、福祉・舞台芸術分野の団体、また支援センターから講師を招いたレクチャーを実施。支援センターが企画する展覧会の見学も行いました。さらに連携企画の新たな試みとして、ブロック内の支援センターを紹介するパンフレットを作成しました。



1. 支援センターの活動事例から鑑賞支援について考える



2024年4月、事業者による障害のある人への合理的配慮の提供が義務化され、鑑賞支援の取り組みが意識的に行われるようになってきました。研修ではこれまでも鑑賞支援を取り上げてきましたが、今回は美術分野の取り組みについて、長野県のザワメキサポートセンターと、山梨県のYAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンターの事例を紹介してもらいました。事例紹介のあと、後半は2つのグループに分かれ、感想や質問、各々の取り組みなどを話し、最後に全体で共有しました。

(2024年7月8日〈月〉、オンラインにて実施、22名参加)

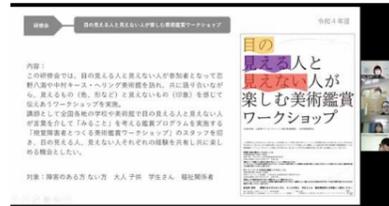
上：「ザワメキアート展」にて制作背景までいねいにつづられたキャプション
下：YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンターによる中村キース・ヘリング美術館での美術鑑賞ワークショップ
All Keith Haring Artwork ©Keith Haring Foundation
Courtesy of Nakamura Keith Haring Collection.



Schedule

当日のスケジュール

- 14:10 事例1 ザワメキサポートセンター (長野県障がい者芸術文化活動支援センター)
- 14:35 事例2 YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター
- 15:05 グループディスカッション
- 15:35 ディスカッションの共有、オブザーバーからのコメント



講師



中村 勘二、持田 めぐみ、吉澤 千恵子
(ザワメキサポートセンター〈長野県障がい者芸術文化活動支援センター〉)

なかむら・かんじ(左)：1996年の福祉施設入職を機に、障害者の芸術活動支援の取り組みを始める。2011年には県内関係者とNPO法人を立ち上げ、ネットワークの構築を推進。2016年より「ザワメキアート展」を企画運営。
もちだ・めぐみ(中)：2017年からセンター前身のザワメキアート展実行委員会事務局へ、2022年ザワメキサポートセンター設置に伴いスタッフとなる。美術系短大出身のスキルを活かし業務を行う。
よしざわ・ちえこ(右)：2016年の「ザワメキアート展」開始当初から関わり、現在は主に経理を担当しながらザワメキサポートセンターのスタッフとして従事する。



瀧澤 聡、新田 千枝
(YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター)

たきざわ・さとる(左)：2014年に社会福祉法人八ヶ岳名水会に入職。2016年にYAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター事務局へ。2019年より同センター長。
にった・ちえ(右)：2017年に社会福祉法人八ヶ岳名水会に入職、YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンターのスタッフに採用。3年間は法人のアトリエ運営を兼務し、現在は同センターの専属となる。

Case 1

展示会の形式や場所を変えて展開

ザワメキサポートセンター (長野県障がい者芸術文化活動支援センター)

2016年から実施している「ザワメキアート展」にまつわる鑑賞支援が紹介されました。「意識していたわけではないですが、結果的に合理的配慮や鑑賞支援にあたる取り組みをしていました」と中村勘二さん。本展は作家の所属する施設や自宅に訪問し、ていねいな取材をすることを特徴としており、キャプションには作品解説にとどまらず、作家の写真とともに作品が生まれた背景なども紹介しています。またウェブ上での展示(WEB展)、小学校や駅ビルなどに出張するキャラバンなど多様な形式で作品展を展開しています。WEB展では360°カメラで会場を撮影し、オンラインで会場を見て回ることができます。キャラバンは出張先によって作品の選定や展示方法を工夫。例えば小学校の場合は小学生でも楽しめるモチーフの作品を選んだり、解説にルビをふったりしています。2024年は「北アルプス国際芸術祭2024」と連携し「ザワメキアート展2024 ネイチャー インアウト」を企画。会場はバリアフリーを重視し選定しました。また、信州アーツカウンシルと連携して、障害のある人と一緒にアクセシビリティに配慮した両展の鑑賞マップをつくることを計画しています。



ザワメキアート展のWEB展(下記QRコード参照)



Case 2

当事者との対話を通じて「楽しく」一緒に考える

YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター

2022年、2023年に行った鑑賞支援の研修について紹介。研修を企画したきっかけには、全盲で車椅子の人が突然展示を見に来たことがあったそう。「楽しんでもらえたけれど、準備できていればお互いにもっと嬉しい気持ちになれたのでは」と感じ、「まずは楽しい時間を共有し、お互いを知ることから」と研修を企画したと新田千枝さん。2022年には「忍野八海を観光する会」と「中村キース・ヘリング美術館を鑑賞する会」を実施。視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップを講師に迎えました。2023年はPalabra株式会社を講師に、UDキャストによる音声ガイドを付加した「バリアフリー上映会」を実施。映画『ケイコ 目を澄ませて』(2022年)を鑑賞し、その後感想を述べ合う会を設けました。障害の程度や種類を限定せず参加を呼びかけた結果、車椅子のユーザーや知的障害のある人、その親族などさまざまな人が参加。事前の宿泊場所の提案なども行い「一歩踏み込んだ支援をしたことにより、その過程で得るものが多かったです」と瀧澤聡さんはいいます。両研修で聞かれたのは、「障害の有無にかかわらず感想を述べ合う機会は少ない。対話しながら何かを見るのは楽しい」という言葉でした。



バリアフリー上映会

Participants' comments



宮山大輔さん 埼玉県福祉部障害者福祉推進課
障害の程度によって出展者でも会場に行けない場合もありますが、ザワメキアート展のWEB展はそういう人も会場の様子を知ることができると感じました。視覚障害のある人への鑑賞支援は県としても課題で、触って楽しむことなどを考えていましたが、YANさんの事例で言葉で伝え合う取り組みは新たな発見になりました。



石平裕一さん 埼玉県支援センター〈特色型〉
どちらの支援センターもマニュアルに沿った対応ではなく一人ひとりに合わせた関わりで、単に会場や環境を整えればよいわけではないと改めて感じました。

2. 広報物のアクセシビリティについて考える

支援センターではパンフレットやチラシ、ウェブサイト、SNSなどで情報を発信しています。株式会社precogの兵藤茉衣さんと篠田菜さん、^{リョウキ}領家グリーンゲイブルズの^{リョウキ}畠山邦男さんを講師に迎え、情報を発信する側と受け取る側の両方の視点から、より広く情報を届けるための広報物のアクセシビリティについて考えました。後半のグループディスカッションでは、レクチャーの感想や質問点などを話し合い、各地の状況を共有しました。

(2024年9月11日(水)、オンラインにて実施、23名参加)

上：日本語字幕、音声ガイド、手話通訳、多言語対応などを施した映像を配信する「THEATRE for ALL」
下：領家グリーンゲイブルズ



Schedule

当日のスケジュール

- 14:05 兵藤茉衣さん・篠田菜さんレクチャー
- 14:25 畠山邦男さんレクチャー
- 15:15 グループディスカッション
- 15:50 ディスカッションの共有、オブザーバーからのコメント



講師



兵藤茉衣、篠田 菜 (株式会社 precog)

ひょうどう・まい(左)：2015年よりアーティストマネジメントや、アドミニストレーションを担当。2019年「True Colors Festival—超ダイバーシティ芸術祭—」事務局運営統括を経て、THEATRE for ALL設立時、企画・運営統括。2021年より厚労省障害者芸術文化活動普及支援事業全国連携事務局(舞台芸術分野)を担当。

しのだ・しおり(右)：京都大学文学部美学美術史学専攻卒業。広告代理店、デザインコンサルティングにて、新規事業、企業ブランディングに携わり、独立。編集ライター、ファシリテーション等を行う。THEATRE for ALL設立時、コミュニケーションチーム統括、ウェブサービスの設計やコミュニティデザインの領域からprecog事業に参画。



畠山邦男 (認定NPO法人みのり 領家グリーンゲイブルズ)

はたけやま・くにお：認定NPO法人みのり 領家グリーンゲイブルズ アートディレクター、問いかける表現ラボ代表。ニューヨーク市立大学で美術を専攻し学士取得、T. Schreiber Studioにて演劇演出のノウハウを学ぶ。現在は、障害のある人たちが異なる年齢・文化・背景の人々と、多様性から生まれる演劇創作・アート活動などに取り組む。社会の常識にとらわれない自由な発想やエネルギーの力強さ、奥深さに魅了され、表現の魅力を最大限に伝えるべく、苦慮しつつも楽しみながら日々模索中。関わり合いから芽生える豊かさや生の重みを貴び、新しい価値観の創造やインクルーシブな環境づくり、共生社会の実現を目指している。

... Lecture 1

アクセシビリティの検討を通じて生まれるコミュニケーション

兵藤茉衣+篠田 菜

国際交流や福祉、地域活性など多角的なアプローチでアートプロジェクトの企画・運営を行っている株式会社 precog の兵藤茉衣さんと篠田菜さん。「THEATRE for ALL」などの事例紹介を通して、アクセシビリティの考え方を話されました。

当事者とともに考え続ける、アクセシビリティ

precog が運営しているバリアフリー型動画配信プラットフォーム『THEATRE for ALL』は、「劇場体験に、アクセシビリティを」をミッションに、さまざまな人に映像作品を楽しんでもらうことを目的としています。その実現のため、サービス設計の段階で全国のさまざまな障害の当事者団体に意見を聞きました。そのなかで「タイトルにある『ALL』とは誰のことなのか。誰に向けてのサービスかを示さないと当事者に届かないのでは」という指摘をもらったと話す兵藤さん。例えばウェブ上で色のコントラスト比が JIS 規格の基準を満たしていても、組み合わせによって見えやすかったり見えにくかったりするなど、個人差があることがわかりました。

こうしたあらゆる意見を聞きながらもウェブデザインの落としどころを探った経験を踏まえ、篠田さんは「アクセシビリティには正解がありません。決めつけず、当事者との対

話を続け、考え続けることを大切にしています」と話しました。「対話のプロセス」を大切にしていることを precog では積極的に発信しています。「誰にとっても完璧な配慮や調整はできません。プロジェクトごとに、障害の当事者や専門家の意見を取り入れながら、できることをやっていく。その姿勢を示すことを大切にしています」と篠田さん。そして、アクセシビリティを高めることは、障害のある人や日本語が母語ではない人に対して回路を開くだけでなく、誰にとってもこれまで気づかなかった世界の見え方に気づききっかけになると考えて取り組んでいることが話されました。

最後に、さまざまなプロジェクトで蓄積されたノウハウを共有する方法が紹介されました。ノウハウやスキルが属人的になってしまうことを避けるため、precog では「バリアフリー wiki」というドキュメントに記入して社内メンバーで共有しています。「こういう方法で告知した」「ウェブ予約はこのシステムが使いやすい」など、気づいたことなどを随時更新しているそうです。



東京芸術祭「EPAD Re LIVE THEATER in Tokyo ~時を越える舞台映像の世界~」マームとジブシー『cocoon』ユニバーサル上映会、2023年
撮影：宮田真理子

Lecture 2

個別や対面による情報発信の重要性

畠山邦男

畠山邦男さんは、埼玉県上尾市にある領家グリーンゲイブルズを拠点に、視覚障害のある人の生活介護や就労支援を行いながら、利用者の社会参加の場として演劇発表会などを開催しています。レクチャーでは、視覚障害のある人がどのように情報を得ているかが話されました。

細分化される視覚障害の種類

「視覚障害は個人差があるため、一般化して言えることと個別のケースで語らないと伝わらないことがある」と話す、畠山さん。視覚障害の種類は、大きく全盲と弱視に分けられ、全盲のなかでも光を感じられるか感じられないかなどで細分化されること、天候や暗闇などの条件下では弱視の人でも全盲に近くなる場合があるといったことが説明されました。読み書きをするのが難しい視覚障害者は、触覚や聴覚などの感覚を駆使して情報を得ていると言います。全盲のなかでも、先天性と中途障害でも世界の見え方が大きく違うとのこと。領家グリーンゲイブルズでは、支援の際、利用者の障害の内容に合わせて個別に対応しています。

畠山さんは「盲人のための国際シンボルマーク」を紹介し、チラシなどの広報物をつくる際にはこのマークを使うとよいのではないかと話しました。

施設ではどのように情報を伝えているか

視覚障害のある人への情報伝達について、施設での実際の様子が伝えられました。畠山さんは、「利用者への連絡は口頭が中心ですが、それぞれの障害に合わせた対応が中心です」と話します。保護者への連絡を含め行き違いがないようにしたい場合は、メールやLINEも使っています。

点字は、中途障害者には習得が難しいものの、情報を伝える手段の一つとしてあったほうがよいと話しました。また、フォントによっても読みやすさが異なるそうです。「明朝系や和風、丸みのある書体は認識しづらいという声がある」「角ゴシックは太さが比較的均一でくっきりしているので読み取りやすい」「数字の3・6・8・9が見分けにくい」といったことが伝えられました。また、「最近UD デジタル教科書体が見やすいと評判で、一番よく使っている」とのこと。ただし、すべての人に対応できるわけではないので注意が必要です。そして若い人は、「プライベートではチラシをほぼ利用せず、スマホの読み上げ機能を用いてSNSを利用することが多い」傾向があるそうです。また、視覚障害があると芸術は楽しめないという固定観念が強いことに触れ、友人や知人からの「おもしろい」という口コミがあれば興味をもつきっかけになるのではないかと話しました。

「芸術関連情報を視覚障害のある人に届けたい場合は、チラシを活用するよりも、公的機関の広報誌の点字や音声案内、視覚障害者団体などのメーリングリスト、ウェブサイト、SNSを活用すると効果が高いのではないのでしょうか」と、畠山さんはまとめます。そして、個別や対面での案内を希望する障害当事者も多くいるため、少しずつでも視覚障害のある人たちとのつながりをつくることの重要性について指摘しました。

3. 支援センターが企画する公募展を見学する

千葉アール・ブリュットセンター うみのもり（以下、うみのもり）が企画する公募展「うみのもりの玉手箱 4」を見学しました。この展覧会では千葉県内から集まった「よろこび！」をテーマにした作品が紹介されました。絵画、彫刻（立体）、写真、書、クラフト、詩に加えて、フラッグ作品などの幅広いジャンルが特徴的です。昨年度に比べて100点以上も応募が増え、326点が展示されました。

また、千葉市で30年近く障害のある人の表現活動に取り組んでいるまあるい広場や、柏市にある中村順二美術館の企画展も同会場で開催。さらに、埼玉県からみぬま福祉会も招へいされ、福祉施設での表現活動の取り組みや国内外で評価を得ている作品に来場者の関心が寄せられました。

展覧会の見学ではうみのもりのスタッフから、作品や関連イベント、展覧会の運営などについてききました。参加者からは、「対話型鑑賞のイベントが興味深かった」「展覧会の運営について学びがあった」「千葉県での本事業の仕組みが参考になった」という感想も。

当日の午後からは支援センターのスタッフが登壇するトークイベント「つくる・つたえる・つながるサミット」を同館の講堂で開催しました（p.10）。
（2025年1月21日〈火〉、千葉県立美術館、10名参加）

Exhibition

うみのもりの玉手箱 4

日時:2025年1月15日（水）～26日（日）9:00～16:30 / 1月20日休館
会場:千葉県立美術館第5展示室（千葉市中央区中央港1-10-1）
入場無料
主催:千葉県



2024年で開館50年を迎えた千葉県立美術館の一室での開催。うみのもりスタッフ、江崎亮さんの案内のもと展覧会ツアーが行われた



領家グリーンゲイブルズの日常



利用者とスタッフでつくる演劇発表会。1年に1回開催し地域の人や家族などに披露している



うみのもりの玉手箱

「うみのもりの玉手箱」は千葉アール・ブリュットセンター うみのもりが事務局を担い、2021年度から開催している公募展です。千葉県では、2022年度に本事業の担当課が障害者福祉推進課から文化振興課に移管されました。それに伴い、2023年度からは展覧会の規模を拡大して千葉県立美術館で開催しています。作品のジャンルは幅広く、大漁旗といった地域性を取り入れたフラッグ部門では、縦90cm×幅120cmほどの布地に応募者それぞれが描いた作品が展示されています。また、出展作品のなかから県知事賞、うみのもり賞などが授与されます。（写真は「うみのもりの玉手箱 4」）

Topics

連携企画1

支援センターの魅力を発信！

南関東・甲信ブロック支援センター パンフレット制作

2024年度、本事業と支援センターを紹介するパンフレットを新たに制作し、支援センターや各都県の担当課を中心に配布しました。イラストや写真とともに各支援センターの特徴的な活動を紹介したほか、支援センターの特性や役割などについても詳しく解説しています。



パンフレット制作の経緯

広域センターでは本事業や、支援センターの認知度向上を目指して活動しています。各支援センターではウェブサイトやSNS、チラシなどを制作し、それぞれ情報発信を行っていますが、より広報活動を強化したいという声がありました。また、過去の広域センターの事業評価であがった認知度の課題を考慮し制作に至りました。

目次

- 02 About 支援センターとは？
- 06 [埼玉] 埼玉県障害者芸術文化活動支援センターアートセンター集
- 08 [埼玉] ART(s) さいほく
- 10 [千葉] 千葉アール・ブリュットセンター うみのもり
- 12 [東京] 東京アートサポートセンター Rights (ライツ)
- 14 [神奈川] 神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター
- 16 [山梨] YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター
- 18 [長野] ザワメキサポートセンター（長野県障がい者芸術文化活動支援センター）
- 20 Archive 南関東・甲信ブロックの協働 2021-2023
- 22 Interview 支援センターとその役割 長津結一郎



発行/制作：社会福祉法人みぬま福祉会
南関東・甲信障害者アートサポートセンター
デザイン：宮外麻周 (m-nina)
表紙絵/扉絵：西田真緒 (工房集)
イラスト：山里美紀子
似顔絵：関翔平 (工房集)
編集：佐藤恵美
B5サイズ、24頁



広域センターのウェブサイトではPDFを公開中！
<https://skk-support.com/project/pamphlet2024/>

Part 3

MEETING

意見交換会

会議や研修で設けている意見交換会は、広域センター、支援センター、自治体の対話の場。支援センターと自治体の連携、ネットワーク、情報収集や広報といった各都県が課題とするトピックを取り上げました。2023年度に続き、各支援センターの活動を訪問する交流企画も実施しています。



1. 「ネットワーク」 「情報収集・発信」について 意見を交わしました!

「ネットワーク」と「情報収集・発信」という二つのテーマについて意見を交わしました。このテーマは各支援センターへのヒアリングから検討したものです。長野県、神奈川県支援センターから議題が設けられ、グループに分かれて話し合いました。

(2024年6月4日(火)、オンラインにて実施、26名参加)



トピック

私たちの支援センターは2024年度で開設3年目となり、ネットワークを再構築する予定です。長野県では、サポーターとアドバイザーを配置し、さらにアドバイザーのなかから運営委員を委嘱予定です。各支援センターでは、アドバイザーの役割などはどのように設定されていますか。具体的な取り組みやみなさんの考え方を知りたいです。

(中村勘二、長野県支援センター)

当支援センターで設置している協力委員会のメンバーは、その年の課題に対して助言をもらえる人をアドバイザーに迎え、そのほか教育・芸術・司法などバランスよく参加してもらうようにしています。最近では特別支援教育の専門家とのつながりもあります。また、今後相談先になっていただけるよう、福祉施設に積極的にヒアリングに行くなど地道に関係を築いています。

(川村美紗、神奈川県支援センター)

discussion

テーマI

どのようなネットワークをつくっていますか?

設立当初は美術館学芸員や行政などの協力委員会を通じてネットワークを構築してきましたが、現在はネットワークをとらえ直し、イベントや展覧会に関わる人に限らず、支援センターの運営を支えるためのつながりや、障害のある人を支える団体との関係も含めてネットワークだと考えています。また、信頼関係を築くことに重点を置いて、困っている人にピンポイントで支援を行い、その輪を広げていくことを目指しています。今後は、これらの団体との直接的なつながりをさらに広げる方法を模索しています。

(瀧澤 聡、山梨県支援センター)

長野県とは少し異なり、美術分野、舞台芸術分野、法律関係など、それぞれの専門家が継続して関わっています。ほかの人選が必要なときは紹介してもらっています。単年で事業として終わらせず、連携する人、情報を交換できる人を徐々に増やしています。

(村上あすか、東京都支援センター)

ネットワークは支援センターや県によって、とらえ方が異なります。情報収集や活用についても、個人情報もあるので集めた情報をどこまで伝えるか、県が間に入ること、結びつくことができる場面もあります。分担しながらうまく進められればと思っています。

(笠井洋祐、山梨県自治体)

トピック

「芸術文化活動の教室を探している」という相談を受けた際、福祉施設の情報はあっても地域の教室の情報収集が難しく、困ったことがありました。民間の教室で「障害がある人も参加できる」といった情報をどのように収集していますか。

(川村美紗、神奈川県支援センター)

障害のある方から「絵画教室に通いたい」という相談があるなか、受け入れてないところも多いので、その点は課題に感じています。

(こまちだたまお、千葉県支援センター)

まだ調査をしている段階で発信には至っていませんが、アドバイザーが関わっている団体をリストアップしたり、信州アーツカウンシルにも相談したりしています。

(持田めぐみ、長野県支援センター)

民間団体からの問い合わせを受けてマッチングすることがありました。マッチングの際には、障害の種類だけでなく、相談者のパーソナリティをお伝えするようにしています。また、受け入れ先の特徴を理解したり、当事者の状況をていねいにヒアリングしたりする心がけています。

(小嶋芳維、埼玉県支援センター(基幹型))

discussion

テーマII

福祉以外の情報収集や発信に、どのように取り組んでいますか

公募展や鑑賞サポートはウェブサイトに掲載しているので、そこで情報を得ることができるとしています。情報収集については、文化施設から掲載依頼をもらうことが多いです。また、相談に応じて調査やヒアリングをしています。

(村上あすか、東京都支援センター)

神奈川県支援センターが作成されている「おさんぽマップ」は素晴らしい取り組みだと思います。

(新田千枝、山梨県支援センター)

Comment

藤原 顕太

広域センター事業アドバイザー

身体表現の分野は集団での創作活動も多いですが、やりたい人と参加できる活動・団体をどのようにマッチングできるか、支援センターとして今後話し合えるといいですね。障害のある人が参加することを想定してこなかった団体もあるので、ていねいにつなぎたいところです。また例えば、東京アートサポートセンター Rights (ライツ) の身体表現ワークショップのように、きっかけづくりとなるイベントを開催するのも有効かと思っています。

兵藤 茉衣

連携事務局

ネットワークについては、その定義や目的が必要だと思います。団体内で見直すことも大切だと感じました。情報収集については、連携事務局にも全国の情報が寄せられています。以前、民間の教室からも宣伝してほしいという連絡があったので、該当県に提供することも考えたいと思います。

2. 注力する事業や支援センターとの連携について話し合いました！



2024年度も各自治体の職員が、注力する事業を中心に支援センターとの連携状況を紹介しました。その後、3つのグループに分かれてディスカッションを行い、各都県内の市区町村との連携、自治体と支援センターとの連携について意見を交わしました。
(2024年8月7日〈水〉、オンラインにて実施、26名参加)

プレゼンテーション

長野県 「北アルプス国際芸術祭 2024」との連携や作品のレンタル事業

今年度注力する事業は大きく分けて三つあります。一つ目は、関係者とのネットワーク構築です。今年度は、センターの運営体制や実施事業について、障害者の芸術文化活動に幅広い知見と専門性をもつ有識者を運営委員として迎え、専門的な協力や助言を得ながら活動していく予定です。二つ目は、大規模な作品展です。2016年度から開催している「ザワメキアート展」は、今年度伊那市と大町市で開催予定です。国内外のアーティストの芸術作品が大町市内各所で展示される「北アルプス国際芸術祭 2024」の関連事業として実施します。また、伊那会場は展覧会

に加えて、映画上映やワークショップなどの関連プログラムを予定しています。三つ目は、作品のレンタル事業です。今年度新たに取り組む事業として、障害者の芸術作品をレンタルする取り組みを進めています。過去のザワメキアート展出展作家の作品の中から、レンタルに適した作品を選定し、作家の同意を得たうえで企業に貸し出す流れを想定しています。現在、試行を実施しており、試行結果を踏まえて年内を目処に本格実施予定です。

(丸山夏穂、長野県健康福祉部障がい者支援課)

千葉県 大学やコンビニとの協働を通して認知度向上を図る

注力している事業は三つあります。一つ目は、障害のある人の文化芸術活動を支援する人材の育成です。全7回の人材育成講座を予定しており、7月には千葉市の植草学園大学・植草学園短期大学で開催されました。この講座には、障害者支援を専門とする野澤和弘副学長が登壇し、ゼミ生もボランティアとして参加。講座では、みぬま福祉会の職員により、障害のある人の表現活動に関する講演が行われ、その後、支援センターのスタッフによる絵画ワークショップが実施されました。二つ目は発表機会の創出です。今年度も千葉県立美術館で展覧会「うみのもりの玉手箱」を開催予定です。また、本事業の認知度向上を目指して、昨年度の「う

みのもりの玉手箱」の受賞作品の複製画を公共施設やショッピングセンターに展示し、多くの人に触れてもらう機会を提供します。さらに新たな取り組みとして、県内のファミリーマート店舗にて「ファミマギャラリー」を開催。三つ目は情報収集・発信です。在宅での創作活動や福祉事業所で注目されにくい新たな取り組みの発掘、調査に取り組みます。収集した情報をリスト化し、発表機会や表現活動のサポートに活用する予定です。

(和田宗矩、千葉県環境生活部スポーツ・文化局文化振興課)

神奈川県 「ともに生きる社会」の実現を目指した取り組みを展開

神奈川県では「神奈川県当事者目線の障害福祉推進条例」の理念を具現化するために、障害福祉に関する計画を包含した新たな基本計画を2024年に策定しました。芸術分野に関しては、「ともに生きる社会かながわ憲章」の理念を踏まえ、障害の程度や状態にかかわらず誰もが文化芸術を鑑賞することができる、人生を豊かにする取り組みを推進しています。支援センターの事業で特に注力していることは、芸術文化活動を支援する人材の育成です。事業所に芸術家を派遣し、希望に応じた体験活動を行い、事業終了後も継続して事業所自らが芸術文化活動を

実施できるように、事業所の職員とともに取り組んでおり、地域における文化施設とのつながりがもてるような働きかけを意識して実施しています。また県では、子どもから大人まですべての人が舞台芸術に参加して楽しめる「共生共創事業」や100点を超える作品を展示する「かながわともいきアート展～生きること、表現すること～」、当事者の作品展示や舞台発表を行う「神奈川県障害者文化・芸術祭」を開催します。

(志村穰、神奈川県福祉子どもみらい局福祉部)

東京都 より多くの人が関われる美術や音楽の場づくりに注力

東京都では、東京都障害者・障害児施策推進計画に基づき、障害者の文化芸術活動を推進しています。今年度注力している事業は四つあり、一つ目は「障害者芸術活動基盤整備事業」です。東京アートサポートセンター Rights (ライツ) が運営し、ほかの事業と連携して継続的に実施されています。二つ目は「東京都障害者総合美術展」です。1986年から毎年開催され、今年度は7月に西武百貨店池袋本店で実施しました。展示された約200点の入選作品の中から、優秀作品20点を表彰しています。三つ目は「障害者のためのふれあいコンサート」。障害のある人

やその家族を招待し、芸術に触れる機会を提供しています。四つ目は「つながらず音楽会」です。障害のある人の発表機会を創出し、年2回の開催を予定しています。応募者のなかから選ばれた8組の楽器演奏や合唱の発表、またゲストアーティストによる演奏などを行っており、表現活動に対するモチベーションの向上、また多様な人の交流や相互理解の場を目指しています。この事業は、芸術文化・スポーツ振興を所管している生活文化スポーツ局と協働で行っていることも特徴です。

(山崎眞生、東京都福祉局障害者施策推進部企画課)

山梨県 まちなかの複数箇所で開催する企画展をオンラインでも配信

山梨県では、山梨県障害者文化芸術活動推進計画に基づき、「楽しむ」「支える」「深める」の三つの視点で事業を進めています。「楽しむ」の視点では、ふれあい創作活動の支援、文化芸術イベント、障害者文化芸術作品展に取り組んでいます。また文化芸術イベントでは、「山梨県障害者芸術・文化祭」を開催していますが、これは主に舞台発表、音楽やダンスなど、施設や団体での練習の成果を発表する機会となっています。「支える」では、支援センターによりコーディネーターの設置や企画展の開催などを進めています。「深める」では、今年度も障害のある人とな

人が共演するファッションショーを開催し、障害のある人がランウェイを歩くなど社会参加につながりました。今年度注力している事業は、障害者の芸術作品を広く発信する企画展の開催です。10月中旬に開催する甲府市内の複数のギャラリーやカフェでの展覧会では、県内外の作家の作品を展示する予定です。そして、デジタル技術を活用して会場の様子をオンラインで公開することで、作品の魅力を広く発信し、作品の認知度や評価を高める取り組みも考えています。

(笠井洋祐、山梨県福祉保健部障害福祉課)

埼玉県 作品を通じた収益化と継続している事業の発展

今年度、障害のある人による作品の利活用事業に注力しています。作品の収益化に向けた重要な事業として、現在約50名の作家から寄せられた作品を特設サイト(埼玉県障害者アートの利活用推進)で紹介し、企業への販売を計画しています。この事業に向けた仕組みの整備も進めています。支援センターと連携して取り組んでいる事業としては例年行っている「埼玉県障害者アート企画展」があり、前年度は103名の作家による600点の作品が展示され、1700名が来場しました。また、今年度は埼玉県立近代美術館で開催される県展の関連企画として県内の障害のある人の作品を展示しました。さらに、さいたまスーパーアリーナで

毎年開催されている音楽フェス「ビバラロック 2024」との連携では、会場近くの広場に設置されたブースにて、15名の作家による作品を展示し、より多くの人に見てもらえる機会を創出しました。県と支援センターは月に一度ミーティングを行い、情報交換や意見交換をしています。年間を通じて、支援センターからは経営ノウハウや埼玉県障害者アートオンライン美術館のコンテンツ制作、展示方法についてのアドバイスなどの協力を得ています。

(金子美樹子、埼玉県福祉部障害者福祉推進課)

Comment

中村亮子 広域センタースタッフ

広域センターでは、自治体の担当者による事例報告会を毎年開催しています。今年度もすべての自治体から出席があり、今年度注力する事業や支援センターとの連携について伺いました。この会議は自治体の担当者が県を超えて関わる貴重な場となっています。会議後に他県の担当者にも事業について問い合わせるなど、相談しやすい関係になっているという声もあり、今後もブロック内の自治体の活動状況を知る機会として継続していきたいと思っています。

グループディスカッション

多古町と浦安市から障害のある人の作品展示の依頼がありました。多古町では、こども園、福祉施設、高齢者施設での展示でした。浦安市では、公募展の進め方、フライヤーに関する相談、作品選定や展示をサポートしています。自治体から「美術のアトリエを紹介してほしい」「障害のある人に向けた冊子をつくりたい」という相談もありました。

(こまちだたまお、千葉県支援センター)



障害者作品展での協力の相談があり、作品展示の方法などを一緒に考えています。その事例をほかの自治体にも紹介し、東松山市からも展示について相談がありました。もともと市町村で取り組んでいる作品展をボトムアップしたいといった相談からの関わりが増えています。地元のつながりも増え、お互いに学び合える関係になっています。支援センター自体や普及支援事業の内容も知られていないと感じています。

(石平裕一、埼玉県支援センター〈特色型〉)

市区町村の自治体とはどのように連携していますか?

discussion



県内の市町村の文化局の職員が集まり、事業を紹介する機会がありましたが、支援センターがあまり認知されていないことが課題と感じています。巡回展を実施し、展示機会を増やすことで市町村にもセンターを知ってもらおう機会にしたいと思います。

(関めぐみ、千葉県自治体)



市町村の自治体に支援センターがあまり知られていないと思います。センターの役割を広く伝えていく必要を感じています。

(新田千枝、山梨県支援センター)



展示会の設営での協働はありませんが、今年度の展示会では作品を見ていただくことで、さらに理解を深めていただく予定です。

(新田千枝、山梨県支援センター)



密に連絡を取り合い、要望を伝えたり、県からの率直な意見も出してもらったりなど、一緒に考えることができています。相談事業では事案の対応についてなど、判断を迷う際に相談しています。

(江崎亮、千葉県支援センター)

discussion

支援センターと各都県の担当課はどのように連携していますか?



本事業の担当課が文化課に移管されてから、文化施設とのつながりは増えていきます。一方で福祉事業所とつながっているのは福祉課なので、両課との連携が必要だと感じています。

(こまちだたまお、千葉県支援センター)



自治体の人たちにどのように関わってもらうかが重要だと感じています。埼玉県では展示会の作業と一緒に、市町村の展示会でも一緒に展示しています。作品展に携わる前と後で担当者の意識が変わったことが印象的でした。

(石平裕一、埼玉県支援センター〈特色型〉)



全体的な方針やネットワークの在り方について方向性をすり合わせています。県での類似事業との連携はもう少し効果的にできればとも思っています。県は展示会などのイベント開催、センターは土壌づくりという役割で取り組んでいます。

(川村美紗、神奈川県支援センター)



3. 「広報物のアクセシビリティ」について意見を交わしました!

第2回の研修 (p.22) ではレクチャーの後に3グループに分かれ、レクチャーの感想や広報物のアクセシビリティについてそれぞれの取り組み、課題などを話し合いました。

(2024年9月11日〈水〉、オンラインにて実施、23名参加)



障害当事者の気持ちや考えを理解したうえで、広報やチラシづくりを進める必要があると感じています。イベントの参加申し込みはQRコードが主ですが、視覚障害の人にとってはこの方法は難しいと思います。昨年、視覚障害のある人が演奏するコンサートに電話で問い合わせがあり、申し込み時の配慮も必要だと感じました。

(宮山大輔、埼玉県自治体)



広報物は誰に届けたいのかを明確にする必要があると思います。障害の有無に関わらず、若い人や高齢者などターゲットに応じてデザインが変わるので、デザイナーや演出家もノウハウのアップデートが必要ではないでしょうか。情報がどのように受け取られているのかを把握し、ターゲットを明確にする必要もあると思います。

(田中真実、神奈川県支援センター)



障害のある人に情報を届けるために必要なことは?

discussion



センターのパンフレットは支援者や当事者を含む多様な人を想定しています。すべての配慮をしようとすると情報が多くなり、ルビを振ったり文字を大きくしたり、点字を加えるなど、情報が多くなり逆に使いづらくなってしまいう可能性があるので、情報が多くなり逆に使えなくなってしまう可能性があります。そのため最小限の配慮に留め、個別の要望に応じて対応しています。紙媒体やウェブサイトなど、さまざまなアクセス方法を準備しています。

(川村美紗、神奈川県支援センター)



アクセシビリティを考える際、障害のある人が読みやすいデザインを心がける必要があると思いますが、同時に支援者にもわかりやすいデザインを意識することも重要ではないでしょうか。情報伝達経路をどのように大事にし、それに伴ったデザインを行うかを意識的に進める必要があると感じています。

(江崎亮、千葉県支援センター)

Comment

藤原顕太 広域センター事業アドバイザー



情報を誰に届けたいのか、そのためにはどのような方法や媒体が必要か、そのなかでどう情報保障していくかといった具合に、まずは広報計画全体を考えることが大切だと思います。支援センターの場合、都道府県単位で考えようとする範囲が広くなりがちで、届けたい具体的な人をイメージするのが大変という場合もあるかもしれません。地域で活動するさまざまな支援者や当事者とのつながりをつくることで、広報についても相談し合える関係をつくれるとよいのではないのでしょうか。

Topics

連携企画 2

支援センターを訪問!

見学・交流企画

第1回



2024年7月15日(月・祝)

障がいの基礎とアート活動の意義

午前は野澤和弘さんによる講義「障がいの基礎」、みぬま福祉会の小嶋芳維による講演「アート活動の意義」、午後からはこまちだたまおさんによるワークショップ「絵画表現」を行いました。

会場：植草学園大学・短期大学 M棟1階21・22教室(千葉県千葉市)
主催：千葉県

2024年9月30日(月)

アートセッションズ in さいほく 2024

埼玉県北西部の障害のある人や福祉事業所から集まった100名ほどの作品が展示されました。

会場：東松山市総合会館1階多目的室(埼玉県東松山市)
主催：ART(s)さいほく

[参加者の声]

作品の見せ方の工夫が素晴らしく、ポータブルな仕様の工夫も参考になりました。(川村美紗、神奈川支援センター)

仕器は貸し出しもしているようで、周りに広める方法としてもよいと思いました。奥のほうにあったレコードの作品の見せ方もとても凝っていました。(田中真実、神奈川支援センター)

第2回



第3回



2024年10月17日(木)

川口太陽の家・工房集 アトリエ活動見学

広域センターの運営母体である、みぬま福祉会のアトリエをまわり、作家や作品の紹介に加えて創作環境の工夫や支援員との関係性についても話しました。

会場：工房集(埼玉県川口市)

[参加者の声]

文化振興課ではこれまで、福祉施設の現場を訪問することがなかったので、作家さんに直接出会う、よい機会になりました。ギャラリーでの作品展示やショップも参考になりました。(関めぐみ、千葉県自治体)

今年度も支援センターや自治体の希望者を対象に「見学・交流企画」を実施しました。各支援センターが企画するイベントに参加することで、担当者の交流を促進し、事業の手法について学びの場となることを目指しました。

第4回



2024年10月18日(金)

「雑踏」展 in 甲府

甲府駅周辺のカフェやギャラリーに、県内外から集まった10名の作家による作品が展示されました。

会場：甲府駅周辺6会場(山梨県甲府市)

主催：山梨県、YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター



[参加者の声]

まちづくりと連動した企画がとても興味深かったです。お店側との関係も上手につくられていて、まちづくりとの連携での可能性を感じました。千葉県でも空きテナントでの展示を行っています。地域の再活性と障害者アートのつながりはよいテーマだと思います。(江崎亮、千葉県支援センター)

第5回



2024年12月7日(土)

第15回埼玉県障害者アート企画展

「Coming Art 2024」アーティストトーク

埼玉県で活動する128名による約600点の展覧会。当日は、出展作家や家族、施設の職員などから作品が生まれる背景や創作への想いをうかがいました。

会場：埼玉県立近代美術館 一般展示室1、2(埼玉県さいたま市)

主催：埼玉県障害者アートネットワークTAMAP士〇、社会福祉法人みぬま福祉会

第6回



2024年12月15日(日)

のらくろ道「こーくりアートフェス」

障害の有無などにかかわらず、誰もが楽しめるイベントとして、障害のある人が中心となる人形劇やダンス、音楽など多彩な公演と作品展示を行いました。

会場：高橋のらくろ道(高橋商店街)(東京都江東区)

主催：東京アートサポートセンター Rights(ライツ)



[参加者の声]

どの演目も素晴らしかったのですが、特にダンスはパフォーマーの力強さや表現の豊かさに圧倒されました。まさにあらゆる人が楽しめるイベントだったと感じています。(和田宗矩、千葉県自治体)

Column

展示会の出展や登壇などの 連携や交流が生まれました

2022～23年度に開催した南関東・甲信ブロック合同企画展「カウンターポイントーそれぞれの寄り添うかたち」をきっかけに、県域を超えた連携や交流が自然と生まれています。合同企画展に出展した作家や団体が他都県の支援センターや、他ブロックの企画に参加した軌跡を紹介します。また、本事業や支援センターのつながりから広域センターの実施団体であるみぬま福祉会の作家が展示会に招へいされました。

山梨



埼玉

山梨県支援センターが主催し、甲府駅周辺の6会場で行われた展示会「雑踏展 in 甲府」(p. 35)に、埼玉県在住の小林一緒さん、柴田鋭一さんが出展。小林さんの作品は和菓子屋に併設するギャラリーに展示されました。



東京



神奈川

東京都支援センターが主催したイベント「のらくろード『こーくりアートフェス』」(p. 35)に、横浜市を拠点に活動するOUTBACKアクターズスクールが出演。「のらくろード」と呼ばれる江東区の商店街で、メンバーの実体験をもとに制作したオリジナルのパフォーマンスを屋外で披露しました。



千葉



埼玉

2024年7月、千葉県支援センターが企画した講座「障がいの基礎とアート活動の意義」(p. 34)に広域センターのスタッフが登壇。実施団体のみぬま福祉会や工房集、埼玉県支援センターの活動について話しました。また、2025年1月には千葉県支援センター企画の「うみのもりの玉手箱 4」(p. 25)にみぬま福祉会の作家が招へいされました。



埼玉



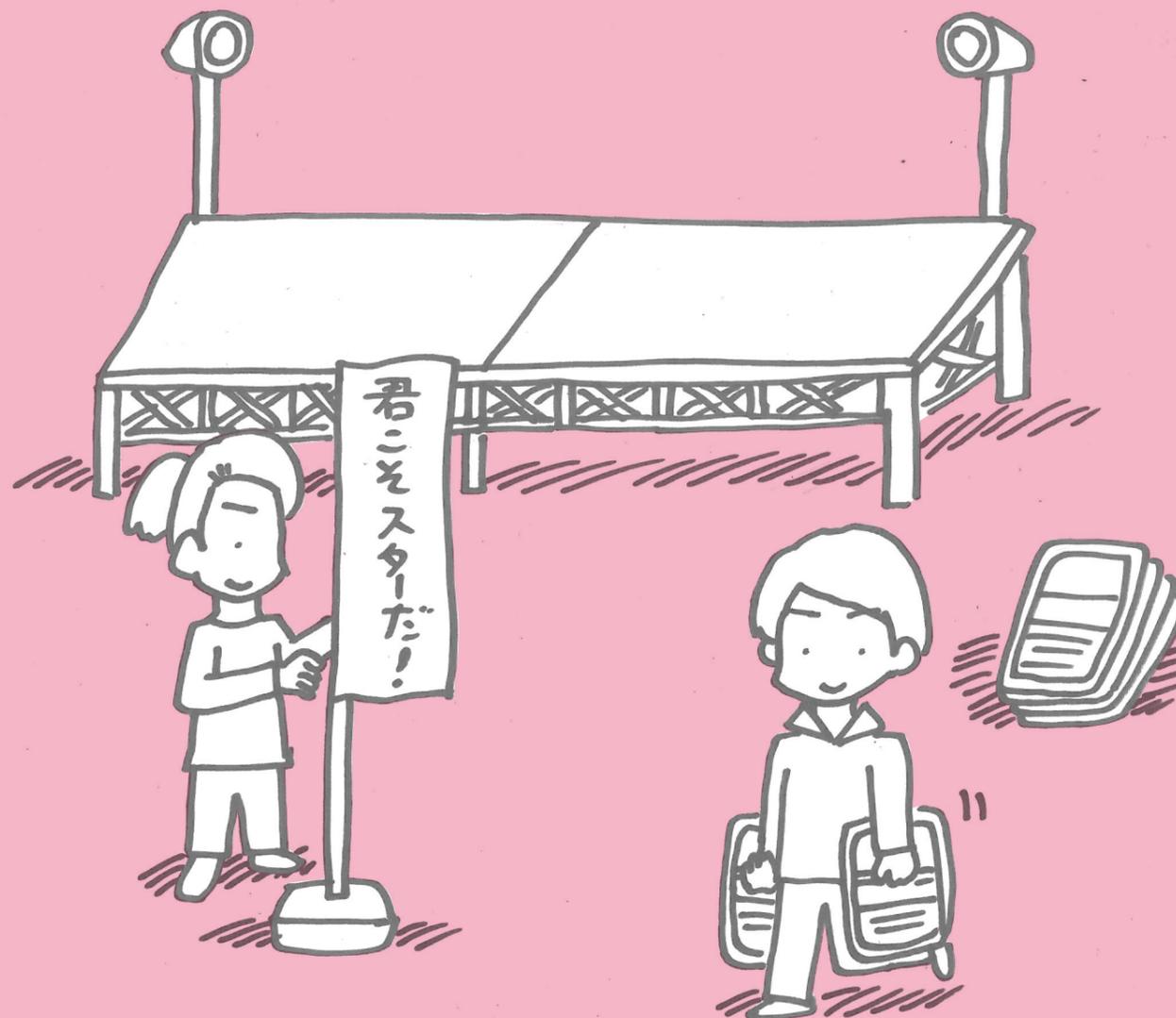
南東北・北関東ブロック

南関東・甲信ブロックの近隣である、南東北・北関東ブロックの広域センターが関わる茨城県水戸市での展示会「茨城県自閉症協会50周年記念事業「表現と仕事 一人ひとりを大切にすること」」(2025年1月10日～12日、水戸市民会館)にみぬま福祉会の作家が招へいされました。



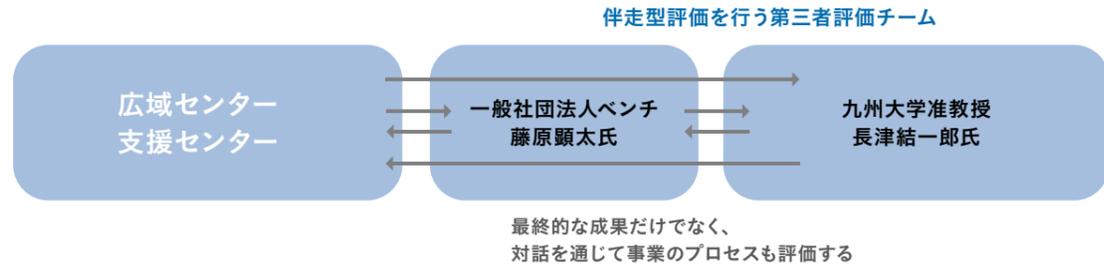
Part 4 EVALUATION 事業評価

2021年度より長津結一郎さんと藤原顕太さんの伴走のもと、ロジックモデルを活用した事業評価を続けています。4年目となる2024年度もアンケートの集計から目指す成果への実現をはかりました。毎年、事業に合わせてアウトカムの項目を見直ししながら、よりよい事業を目指しています。



評価体制

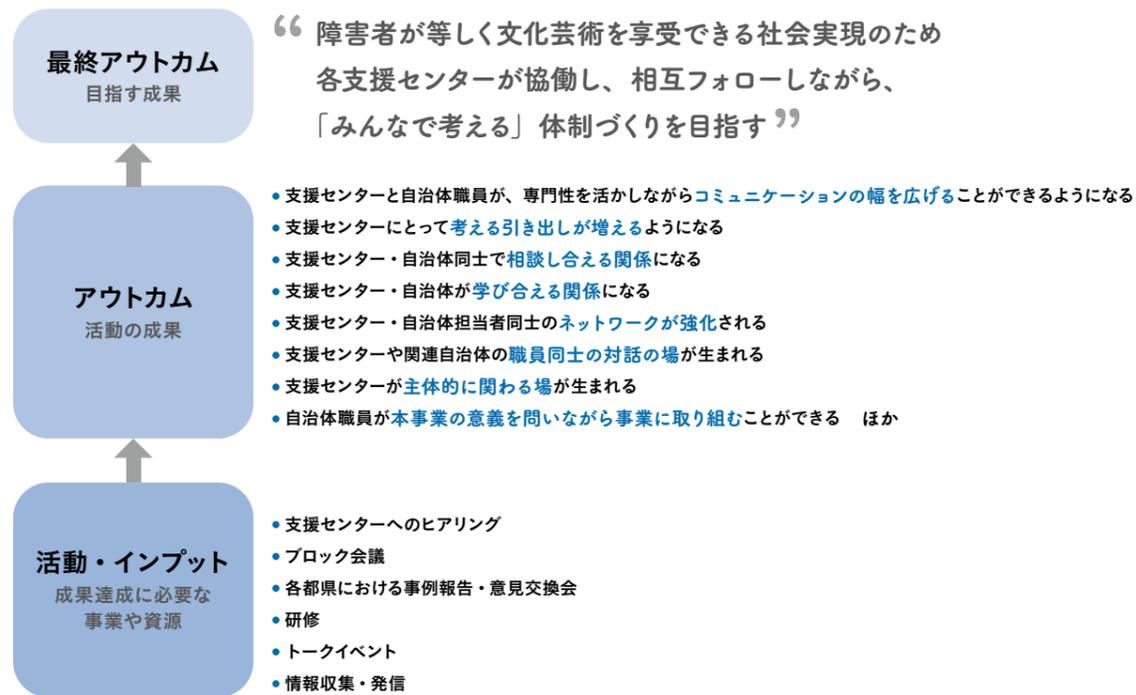
当センターがスタートした2021年度から、事業の指標とプロセスが適正であったかを客観的に振り返るため、第三者による評価チームを設置しています。評価の方法としては「伴走型の評価体制」を採用。事業の最終報告だけを評価するのではなく、当センターに計画段階から振り返りまでを伴走する形で事業のプロセスを把握し、対話しながら評価を進める体制として長津結一郎さん（九州大学准教授）と藤原顕太さん（一般社団法人ベンチ）にご協力いただきました。



評価方法

——ロジックモデルを活用した目標設定と事業計画

今年度も目指したいことを整理し、それに基づいて評価尺度（下図）を活用。広域センターとしての「最終アウトカム（目指す成果）」は、2021年度から同じものを採用し、それに伴う「アウトカム（活動の成果）」と「活動・インプット（成果達成に必要な事業や資源）」を設定しています。年度後半には、支援センター向け・自治体向け・広域センター向けにそれぞれ作成したアンケート調査を行い、ロジックモデルと照らし合わせました。



アンケートとロジックモデル

アンケート調査(下記)による回答をもとに、ロジックモデル(目標)に対する達成度を算出して表にしました(p.40)。目標を達成した数値には表に色をつけています。

アンケート項目 ※()内の文言は自治体向けのアンケートで使用

アンケートについて

- 2024年1月に実施しました。
- アンケートは、支援センター向け(Q1～3、Q5～12、Q14)、自治体向け(Q1～2、Q4、Q6～7、Q9～11、Q13～14)、広域センター向け(Q15～21)にそれぞれ作成しています。
- 回答は、支援センター担当者8名、自治体担当者6名、広域センターについては自己チェックリストで回答しました。
- Q1～9、Q19～20については「非常にそう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「ややそう思わない」「全くそう思わない」の5段階で回答。Q10～18、Q21についてはチェックリストを作成し、チェックが付いた数に応じた評価を行いました。

- Q1 ご自身の(ご自身の自治体が設置している)支援センターの年度当初の課題はどれくらい解決されたと思いますか。
- Q2 広域センターや他の支援センターが頼れる存在であると思いますか。
- Q3 ご自身の支援センターは、自治体職員と、専門性を活かしながらコミュニケーションの幅を広げていると思いますか。
- Q4 自治体職員が支援センターと、専門性を活かしながらコミュニケーションの幅を広げていると思いますか。
- Q5 広域センターの事業を通じて、支援センターが考える引き出しが増えたと思いますか。
- Q6 他の支援センターと(他の支援センターやブロック内の他の自治体と)お互いに相談をし合える関係にあると思いますか。
- Q7 今年度の活動の幅は、前年度と比べて広がったと思いますか。
- Q8 今年度、支援センターにおける課題解決や支援のためのスキルは向上しましたか。
- Q9 支援センターの認知度は向上しているという実感がありますか。
- Q10 研修会/ブロック会議/自治体事例報告について、あてはまるものにチェックをつけてください(チェック項目は3つずつ)。
- Q11 支援センター(自治体)同士のネットワークの状況について、あてはまるものにチェックをつけてください(チェック項目は6つ)。
- Q12 支援センターや広域センターの支援について、あてはまるものにチェックをつけてください(チェック項目は4つ)。
- Q13 広域センターからの支援について、あてはまるものにチェックをつけてください(チェック項目は5つ)。
- Q14 今年度制作したパンフレットについて、あてはまるものにチェックをつけてください(チェック項目は4つ)。
- Q15 支援センターや関連自治体の職員同士の対話の場が生まれるための活動について、あてはまるものにチェックをつけてください(チェック項目は5つ)。
- Q16 支援センターが主体的に関わる場が生まれるための活動について、あてはまるものにチェックをつけてください(チェック項目は4つ)。
- Q17 支援センター職員の支援力向上につながる知識を得る場が生まれているかどうか、あてはまるものにチェックをつけてください(チェック項目は6つ)。
- Q18 自治体職員が本事業の意義を問いながら事業に取り組むことができるための活動について、あてはまるものをチェックしてください(チェック項目は6つ)。
- Q19 今年度の活動の中で、支援センター同士が他の支援センターの事業を体験し合うことが起こっていたと感じますか。
- Q20 今年度実施した自治体(支援センター)へのアプローチについて、支援センターや自治体単体ではカバーできない課題に取り組んでいましたか。
- Q21 情報や制度だけでなく、支援センターの想いが伝わるパンフレットが完成・配布されているかどうか、あてはまるものをチェックしてください(チェック項目は6つ)。

目標と達成度

表の見方

- 事業当初に作成した「目標」に対し、アンケートをもとに集計しています。
- アンケートの設問が5段階のものは5.0を最高値にし、平均値を算出。チェックリストで回答したものについては、項目中の選択数に応じて算出。

■ 目標を達成

アウトカム	目標	アンケート	達成目標	支援センター (n=8)	自治体 (n=6)	広域センター (n=1)	評価尺度	
最終アウトカム	各支援センターが協働し、相互フォローしながら、「みんなで考える」体制づくりを目指す	Q1	3.5	3.93	3.83		5段階	
		Q2	4.0	5.00	4.50			
中間アウトカム	支援センターが自治体職員と、専門性を活かしながらコミュニケーションの幅を広げることができるようになる	Q3	4.5	4.21				
	自治体職員が支援センターと、専門性を活かしながらコミュニケーションの幅を広げることができるようになる	Q4	3.5		4.67			
	支援センターにとって考える引き出しが増えるようになる	Q5	4.0	4.43				
	支援センター同士で相談し合える関係になる	Q6	4.0	5.00	3.67			
	支援センターや自治体が前年よりも活動の幅が広がる	Q7	4.0	4.21	4.33			
	支援センターにおける課題解決や支援のスキルが向上する	Q8	4.0	3.93				
	支援センターの認知度が向上しているという実感が生まれる	Q9	4.0	3.64	4.17			
初期アウトカム2	支援センター・自治体が学び合える関係になる	Q10	4.0	4.14	3.50			チェックがついた項目の数に応じた配点
	支援センター担当者同士のネットワークが強化される	Q11	4.0	4.36	3.00			
	支援センターの支援の質が上がる	Q12	4.0	4.14				
	他の自治体の状況を知ることによって自治体における支援体制が充実する	Q13	4.0		3.00			
	支援センターのステークホルダーとのコミュニケーションが円滑になる	Q14	4.0	2.21	1.33			
初期アウトカム1	支援センターや関連自治体の職員同士の対話の場が生まれる	Q15	4.0			5.0		5段階
	支援センターが主体的に関わる場が生まれる	Q16	4.0			5.0		
	支援センター職員の支援力向上につながる知識を得る場が生まれる	Q17	4.0			3.0		
	自治体職員が本事業の意義を問いつながりながら事業に取り組むことができる	Q18	4.0			2.0		
	他の支援センターの事業を体験することができる	Q19	4.0			4.0		
	支援センターや自治体だけではカバーできない課題へのアプローチが行われる	Q20	4.0			4.0		
	情報や制度だけでなく、支援センターの想いが伝わるパンフレットが完成・配布される	Q21	4.0			3.0		

※アウトカム……活動を行うことにより達成が目指される成果

自由記述の回答から

アンケートにて、自由記述欄に記載された内容を一部抜粋して紹介します。

Q 広域ブロック内のネットワークについての意見・感想があれば記述してください。

- 今年度、実際に他県で行われた見学・交流企画にうかがうことで、さまざまな工夫などを感じることができた。(支援センター)
- 支援センターとして、そもそのスタートがアートでそこに福祉や教育が入っているのでベースの学びが不足していると感じています。また、福祉施設でのアートの活動、そしてセンターとしてのご活動もみなさんを見習って進む立場なのでみなさんの存在がありがたい。(支援センター)
- 自治体同士で頻りに連絡を取り合うような関係性ではないですが、ブロック会議・研修会で顔を合わせているので、以前に比べ相談しやすい環境にはなっていると思います。(自治体)
- ブロックのみなさんとの交流の機会を多く設けていただいたおかげで、支援センターのみなさんと気軽に連絡が取り合える関係性がつくれたことは大変ありがたく感じる。1月開催の千葉県の展示会内のトークイベントでは第三者に向けて取り組みを伝える機会だったが、特にブロックのみなさんとの一体感が感じられてよかった。(支援センター)
- 相談対応の場面で、他支援センターと連携したり情報交換をしたりする場面があり、心強く感じています。(支援センター)
- 当支援センターが経験したことのない事例や、今後実施してみたいイベントなどがある際に、他支援センターでの経験や事例を参考にさせていただくことができるのがありがたい。対面での交流の機会があることで、細かな部分での情報交換や共有ができることもとてもよかった。(支援センター)
- 他県も同じような課題・悩みがあるなか、事例を共有することは人材育成につながりますし、他県に負けられないという刺激になりました。(自治体)

Q 広域センターの取り組みについて、気づいたこと、今後期待することなどがあれば自由に記入してください。

- 今年度制作のパンフレットは、支援センターの概要や取り組みがわかりやすくまとめられおり、自治体担当者自身が事業を説明する際にも役立っている。本県では、広報物の作成が予算的に厳しい現状だが、広域センターレベルで作成していただけて非常にありがたい。(自治体)
- ブロック内で、書式やデータの共有システムを作成していただけたらありがたい。(支援センター)
- 作家のオリジナル商品や二次利用商品を県外で販売でき、多くの方に知ってもらえる機会があるとありがたい。(支援センター)
- ブロック間で必要に応じてお互いの展示会やイベントの助け合い(スタッフとしてフォローに入る、搬入搬出のお手伝い、受付当番など)ができたら、ノウハウや多様な在り方を学び合う機会になるのではないかと。(支援センター)
- 障害のある人の芸術活動について、作品をつくる立場に意識が向くことが多いが、アクセシビリティに係る研修会を通じて作品を見る側の立場に立つて考えることの必要性に気がつき、視野を広くすることができたと考えている。(自治体)
- 見学・交流企画は、なかなか足を運べていなかったほかのセンターの取り組みを見学するきっかけになりました。参加できなかったとしても、活動の状況を知ることができ、参考になりました。今後も、支援センター同士をつなぐ活動に期待しています。(支援センター)
- 今年度は音楽に関する相談があり、今後取り組む必要があると考えます。音楽を本ブロックでのテーマの一つとして事例や方法など研修会やワークショップなどを行っていただければと思います。(支援センター)
- 南関東・甲信ブロックの自治体・支援センターがレベルアップしていくために、今後も先進事例の紹介や情報共有など、学びの場となるような取り組みを実施していただくことを期待しています。(自治体)

評価チームによるコメント



長津結一郎

ながつ・ゆういちろう

多様な関係性が生まれる芸術の場に伴走／伴奏する研究者。専門はアーツ・マネジメント、文化政策。障害のある人など多様な背景を持つ人々の表現活動に着目した研究を行っているほか、音楽実技やワークショップに関する教育、演劇・ダンス分野のマネジメントやプロデュースにも関わる。現在、九州大学大学院芸術工学研究院准教授。2013年東京藝術大学大学院博士後期課程修了、博士（学術・東京藝術大学）。著書に『舞台の上の障害者：境界から生まれる表現』（単著、九州大学出版会、2018年）、『アートマネジメントと社会包摂』（共編著、水曜社、2021年）など。日本文化政策学会理事、文化経済学会（日本）理事、日本アートマネジメント学会運営委員。

毎年、年度当初に広域センターと協議し事業目標を設定し、年度末にその点検を行う評価サイクルを導入して4年目となる。今年度は、合同企画展を実施せず、かわりに対面のトークイベントを開催し、各支援センターの広報支援としてパンフレットを作成するなど、新たな事業展開が行われた。これは、長年の事業評価を踏まえた改革といえ、広域センターが主体的に取り組む姿勢がより明確になったと感じ、また伴走者として少しは役目を果たしているのだらうと思えた出来事であった。

広域センターの今年度の事業は、アンケート結果を見る限り、総じて手応えがあり、特に「みんなで考える」体制づくりについては、多くの支援センターや自治体から高く評価された。これまでの広域支援のあり方が、より盤石に機能し始めたことがうかがえる。一方で、支援センターの認知度向上、自治体間の学び合い、ステークホルダーとの関係構築には依然として課題が残る。特に支

援センターの認知度については全国調査でも課題視されており、広報としてのパンフレット制作は一定の効果をもたらしたものの、根本的な解決には別のアプローチが求められることが明らかになった。

今後、広域センターがより効果的な事業展開を図るためには、支援センターの認知度向上を実感できる施策を講じることが不可欠である。また、すでに確立された支援センター間のネットワークを活かしつつ、ステークホルダーの関係構築を重点的に進めることで、各支援センターが地域でより安定した事業運営を行えるよう支援する必要がある。私としては、今後はこれまでの評価手法を踏襲するだけでなく「変革」をいとわずに試行することも視野に入れ、さらに広域センターとして機能を広げる活動に展開していく下支えをしていきたいと考えている。



藤原顕太

ふじわら・けんた

舞台芸術制作者、社会福祉士。日本社会事業大学卒業後に舞台芸術界に入り、舞台芸術制作者に向けた中間支援の仕事に就く。2017年より福祉と芸術に関わる仕事を始め、障害のある人の芸術活動支援に携わる。2021年、アートマネージャーによるコレクティブ「一般社団法人ベンチ」を設立し、理事に就任。埼玉県東松山市の高齢者福祉施設にアーティストが滞在するプロジェクト「クロスプレイ東松山」や、アクセシビリティ・コーディネートなどの事業を行っている。NPO法人Explat副理事長。

今年度の南関東・甲信障害者アートサポートセンター（以下、広域センター）では、例年実施していた展覧会を開催するかわりに、本ブロック内の支援センターと連携したトークイベントの実施や視察ツアーの実施、支援センター向けの相談支援の充実、各センターの想いを紹介するパンフレットづくりなどに取り組んだ。

支援センターのような中間支援組織では、時間・人手・資金などの限られたリソースで、広範なミッション達成に向けて取り組む必要がある。そのため過去の活動を評価したうえで、関係者との対話を積み重ねてニーズを知ること、今優先して取り組む内容を更新し続けることが重要だ。今年度は期せずして本ブロックの支援センターからも、それまで行ってきた活動を見直すことで、支援の質の向上や新たな関係づくりを目指す取り組みがいくつも報告された。

また印象に残った点として、広域センターによ

る支援センターへのアプローチの変化があった。各支援センターとの個別の相談にこれまで以上に重心を置き、現場にも足を運んだことで、それぞれの活動内容やニーズをより高精度に把握し、広域センターとしての支援内容にも反映する取り組みが見られる。もちろんまだ不十分な点もあるが、個別の支援を重ねることでネットワークの質が高まり、「各支援センターが協働し、相互フォローしながら、『みんなで考える』体制づくりを目指す」という最終アウトカム達成に貢献する、という流れの糸口がつかめたのではないだろうか。

今年度のアンケートでは、支援センター同士が相談し合える関係づくりという大きなミッションが達成されつつあることがうかがえる。一方、支援センターとステークホルダーのコミュニケーション向上や、自治体にとって広域センターが今以上に相談できる相手となるための工夫については考えていく必要があるだろう。

おわりに

今年度は新しい事業や発表機会に取り組む支援センターが増え、各地でさらに事業が拡大しました。広域センターでは、2021年度からの3年間に築いたブロック内の支援センターや自治体の方々とのつながりをさらに深める年として、個別の支援センターとの連携の在り方を探りました。千葉県支援センターが企画する展覧会にあわせて開催したトークイベントでは、自治体、支援センターに加えて県内の福祉施設の職員に登壇いただき、このイベントをきっかけに自治体の担当者と県内の福祉施設、来場した施設関係者との交流が生まれました。開催にあたって、千葉県支援センターの事業に対する姿勢に背中を押され、対話を重ねて協働できたことで支援センターとの連携の可能性を感じています。また、支援センターからの希望もあり、2022年度に感染症拡大により中止になったイベント「支援センターによる座談会」も千葉県でのトークイベントにあわせて実施しました。座談会などの事業を通して、「ブロック内の支援センターとの一体感が高まった」「今後も支援センター同士をつなぐ活動に期待している」という感想が寄せられています。

当センターでは、「みんなで考える」ことのできるネットワークを目指しています。今年度は支援センターや自治体の方々と築いた信頼関係と各々の主体的な関わりがよりよい事業につながりました。単年度での地道な事業ですが、今後も事業評価を軸にブロック内の課題やニーズに向き合い、連携を深めながら事業に取り組みたいと思います。

最後になりましたが本事業の実施にあたり、ご協力いただいたみなさまに心より感謝申し上げます。

南関東・甲信障害者アートサポートセンター

Each Center

南関東・甲信ブロック 支援センター一覧

埼玉県・基幹型

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集

実施団体 社会福祉法人みぬま福祉会 所在地 〒333-0831 埼玉県川口市木曾呂1445 工房集内
TEL 048-290-7355 FAX 048-290-7356 E-mail artcenter@kobo-syu.com
URL https://artcenter-syu.com/



埼玉県・特色型

ART(s)さいほく

実施団体 社会福祉法人昂 所在地 〒355-0077 埼玉県東松山市上唐子1532-5 まちこうばGROOVIN' 内
TEL FAX 0493-81-4597 E-mail arts_saihoku@subaru-swc.com
URL https://www.subaru-swc.com/~groovin/



千葉県

千葉アール・ブリュットセンター うみのもり

実施団体 株式会社いろだま 所在地 〒299-4301 千葉県長生郡一宮町一宮2553-8
TEL FAX 0475-36-7411 E-mail info@uminomori.net
URL https://uminomori.net/



東京都

東京アートサポートセンターRights (ライツ)

実施団体 社会福祉法人愛成会 所在地 〒164-0002 東京都中野区上高田3-38-5 太和屋産業ビル2階
TEL 03-5942-7251 FAX 03-5942-7252 E-mail rights@aisei.or.jp
URL https://rights-tokyo.com/



神奈川県

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

実施団体 認定NPO法人S T スポット横浜 所在地 〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル地下1階
TEL 045-325-0410 FAX 045-325-0414 E-mail info@k-welfare.org
URL https://k-welfare.org/



山梨県

YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター

実施団体 社会福祉法人ハヶ岳名水会 所在地 〒408-0025 山梨県北杜市長坂町長坂下条1237-3
TEL 0551-45-7027 FAX 0551-45-8221 E-mail yan@y-meisui.or.jp
URL http://y-meisui.or.jp/yan/



長野県

ザワメキサポートセンター (長野県障がい者芸術文化活動支援センター)

実施団体 社会福祉法人長野県社会福祉事業団 所在地 〒381-0034 長野県長野市大字高田364-1 (長野県社会福祉事業団 本部事務局内)
TEL 026-217-0022 FAX 026-228-0310 E-mail art@nagano-swc.com
URL https://nagano-swc.com/art/



表紙絵＝森川里緒奈（社会福祉法人昴）

扉絵・似顔絵＝関 翔平（工房集）

ART SUPPORT CENTER

南関東・甲信

障害者アートサポートセンター

2024 年度事業報告書



2025 年 3 月 31 日発行

企画・発行 社会福祉法人みぬま福祉会
南関東・甲信障害者アートサポートセンター
〒333-0831 埼玉県川口市木曾呂 1445（工房集内）
Tel: 048-290-7355 / E-mail: artcenter@kobo-syu.com

編集 工房集
制作 佐藤恵美
執筆協力 坂本のどか (p.11～18、20～21)、彌田円賀 (p.22～24)
デザイン 宮外麻周 [m-nina]
センターロゴデザイン PORT
撮影 鈴木広一郎、長崎剛志、長谷川朗、武藤奈緒美、工房集
助成 令和 6 年度障害者芸術文化活動普及支援事業（厚生労働省）

© 社会福祉法人みぬま福祉会
無断転載・複写を禁じます。

南関東・甲信障害者アートサポートセンター
<https://skk-support.com>

南関東・甲信
障害者アート
サポートセンター



社会福祉法人
みぬま福祉会



